第 6 章

洪水ハザードマップに対する住民評価

6-1　桐生市洪水ハザードマップの閲覧・保管状況 6-2
6-1-1　桐生市洪水ハザードマップの閲覧状況 6-2
6-1-2　桐生市洪水ハザードマップの閲覧時期 6-4
6-1-3　桐生市洪水ハザードマップの保管状況 6-5

6-2　桐生市洪水ハザードマップの各項目に対する住民評価 6-6
6-2-1　各項目に対する住民の確認状況 6-7
6-2-2　各項目に対する住民の関心度 6-10
6-2-3　各項目に対する住民の重要性評価 6-13
6-2-4　各項目別に示す住民のわかりやすさの評価 6-16
6-2-5　桐生市洪水ハザードマップの全体評価 6-20

6-3　桐生市洪水ハザードマップに示される指定避難場所に対する評価 6-22
6-3-1　洪水ハザードマップに示される指定避難場所の読み取り状況 6-22
6-3-2　指定避難場所に対する評価と避難意向 6-26

6-4　桐生市洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深に対する評価 6-30
6-4-1　洪水ハザードマップ公表前の時点での住民の浸水深予想 6-30
6-4-2　洪水ハザードマップに示される自宅の予想浸水深の読み取り状況 . 6-33
6-4-3　洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深に対する現実性評価 6-35

6-5　洪水ハザードマップ閲覧後の洪水に対する住民意識 6-37
6-5-1　洪水ハザードマップに示されているような洪水の発生可能性に対する住民意識 6-37
6-5-2　洪水ハザードマップ閲覧後の浸水被害に対する不安感 6-39

6-6　おわりに 6-41

洪水ハザードマップは、住民の災害意識の高揚を図り、平常時においては洪水に備えた事前対応を、災害時においては迅速かつ適切な避難行動を促すことにより、被害を最小限に食い止めることを目的とした、いわば洪水の発生を前提としたソフト面での治水対策と位置付けることができる。洪水ハザードマップの被害軽減効果を最大限に導くためには、洪水ハザードマップが地域の洪水に関わる特性を十分に踏まえていること、地域住民がそれをどのように理解し避難行動に役立てるかといった受容の構造を踏まえること、といった作成上の検討に加えて、そこに記載された内容を住民が正しく理解し、適切な災害意識が継続的に維持されるよう公表方法やその後の運用についても、十分に配慮することが重要となる。

そこで第 6 章では、桐生市洪水ハザードマップの公表によって住民の災害意識・対応行動などに生じた効果を計測するにあたり、まず、配布された桐生市洪水ハザードマップを住民がどのような認識を持って受容したのか、また、桐生市洪水ハザードマップの重要性や有効性などの観点からどのような認識をもって評価しているのかを、第二回アンケートの回答をもとに把握する。

なお、ここでの分析は、次章におけるパネル調査による洪水ハザードマップの公表効果計測における分析対象者と一致させるために、第二回アンケートでの有効票のうち、第一回アンケートと第二回アンケートにおいて同一世帯・同一回答者であるもの（2,467 票）のみに限定して行うものとする（図 6-1 参照）。

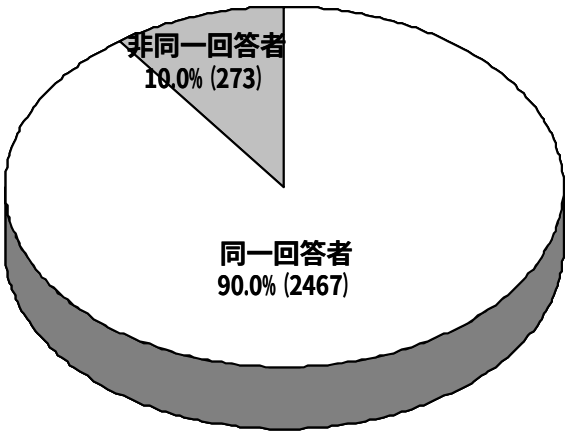


図 6-1 洪水ハザードマップの住民評価ならびに公表効果分析の対象者

6-1 桐生市洪水ハザードマップの閲覧・保管状況

洪水ハザードマップは平常時において住民に公表・配布されることから、住民の災害意識のありようによっては、その閲覧や保管が十分に行われていないことが懸念される。そこでここでは、桐生市洪水ハザードマップ公表後の第二回アンケートでの回答をもとに、調査対象者の桐生市洪水ハザードマップの閲覧状況並びに保管状況についての把握を行う。

point
- **調査対象者の約 90%が「洪水ハザードマップを見た」と回答。閲覧時期については 80%近くが配布されてから2～3日以内に見ていると回答。**
- **本調査によって初めて洪水ハザードマップを見た住民や見ていない住民も 10%以上おり、配布後のフォローアップ作業の一環として、このような住民意識調査や配布後の住民に対する説明会などの実施も重要。**
- **住民が，洪水に関して何らかの知識や関心を持つ機会があったか否かで閲覧・保管の状況に若干の差が見られる．このことから、洪水ハザードマップの受容推進や後々の住民にとっての有用化を図るためには、洪水に関して何らかの知識を与える機会を作ることが重要といえる。**

6-1-1 桐生市洪水ハザードマップの閲覧状況

・図 6-2 は、桐生市洪水ハザードマップの閲覧状況を、回答者の生年、カスリン台風の経験、カスリン台風に関する災害教育や地域コミュニティでの災害伝承の有無、洪水に対する意識の有無、との関係のもとで示したものである。
・約 90%の住民が少なくとも一度は桐生市洪水ハザードマップを「見た」と回答しており比較的多くの住民に閲覧されていることがわかる。
・若年層や、カスリン台風の未経験者、カスリン台風に関する災害教育や災害伝承を有しない住民、洪水について考えたことがない住民、などのような、地域の洪水について知識や関心が少ない住民層においては、閲覧率が若干低いものとなっている。

図 6-2　洪水ハザードマップの閲覧状況

6-1-2 桐生市洪水ハザードマップの閲覧時期

・図 6-3 は、回答者の桐生市洪水ハザードマップの閲覧時期を、回答者の生年、カスリン台風の経験、カスリン台風に関する災害教育や地域コミュニティでの災害伝承の有無、洪水に対する意識の有無、との関係のもとで示したものである。
・これによると、回答者全体では、60%近くが桐生市洪水ハザードマップを配布直後に閲覧したと回答しており、住民の関心の高さが伺える。
・若年層や、カスリン台風の未経験者、カスリン台風に関する災害教育や災害伝承を有しない住民、洪水について考えたことがない住民、などのような、地域の洪水について知識や関心が少ない住民層においては、閲覧の時期が遅くなる傾向にある。
・本調査によって初めて洪水ハザードマップを見たとする住民も約 6%おり、配布後のフォローアップ作業の一環として、このような住民意識調査や配布後の住民に対する説明会の実施など、住民に洪水ハザードマップを有効に活用してもらうための方法を考えていくことも重要であると考えられる。

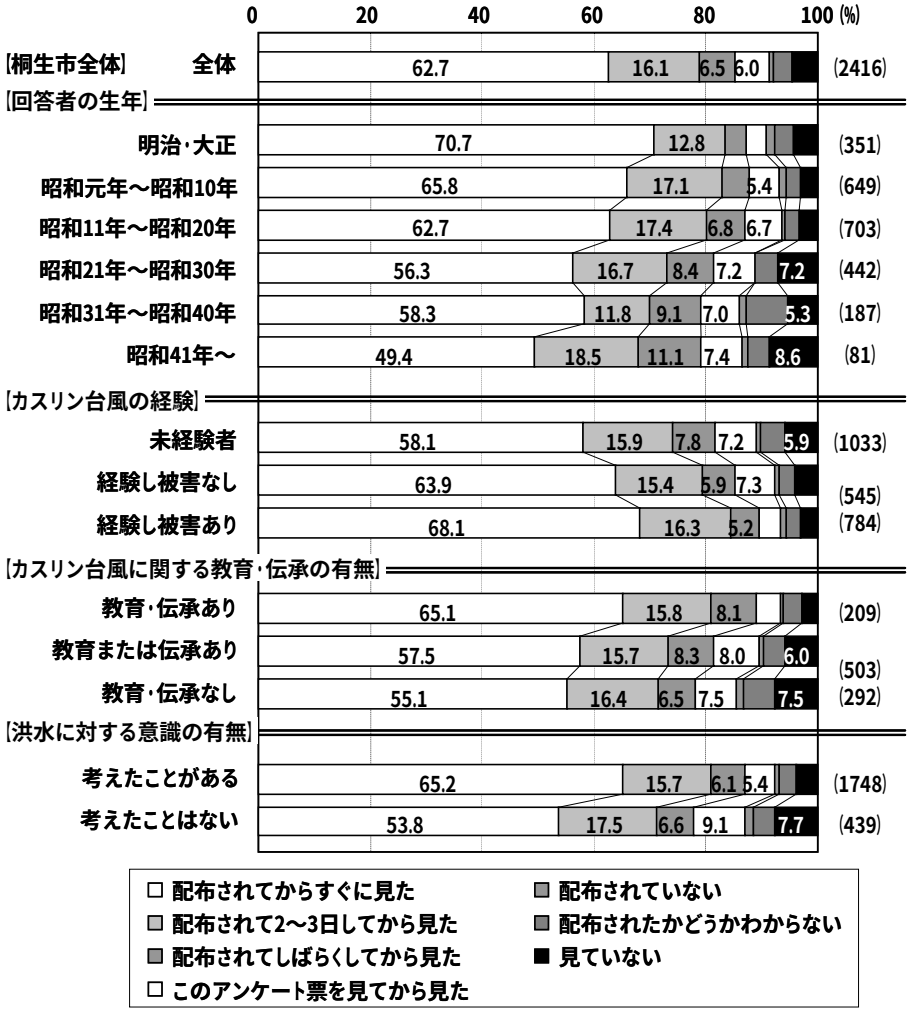


図 6-3 洪水ハザードマップの内容項目別の閲覧時期

6-1-3 桐生市洪水ハザードマップの保管状況

・図 6-4 は、回答者の桐生市洪水ハザードマップの保管状況について、回答者の生年、カスリン台風の経験、カスリン台風に関する教育や伝承の有無、洪水に対する意識の有無、との関係のもとで示したものである。
・これによると、「見やすい場所に貼ってある」との回答は、おおむね 20%弱にとどまっているものの、「すぐに取り出せる場所にしまってある」とする回答と合わせると 80%以上を占めており、住民が洪水ハザードマップを非常時の備えとしてその役割を少なからず認識している様子が伺える。
・若年層において、保管場所がわからないとの回答が多くを占めている。

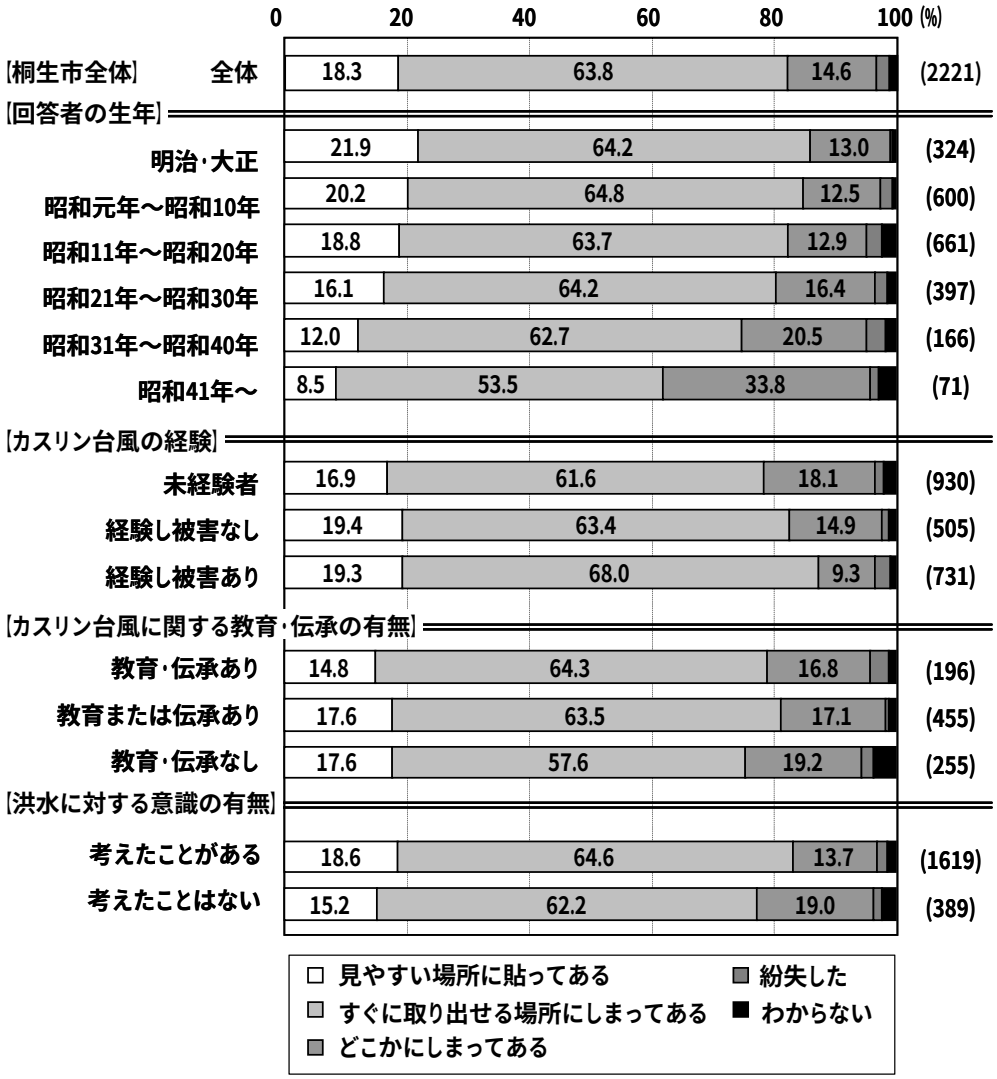


図 6-4　洪水ハザードマップの保管状況

6-2　桐生市洪水ハザードマップの各項目に対する住民評価

ここでは、桐生市洪水ハザードマップに掲載されている内容項目別の住民評価の実態を把握する。掲載内容の項目、ならびに住民評価を把握する際の視点は、以下の通りである。

■桐生市洪水ハザードマップの掲載内容項目

「予想される浸水深」 ..... （地図）
「ご家庭の避難場所」 ..... （ 〃 ）
「災害情報の伝達経路・呼びかけ内容」 ..... （ 〃 ）
「避難時の心得」 ..... （ 〃 ）
「過去の水害記録」 ..... （ 〃 ）
「土石流危険渓流・崖崩れ危険場所」 ..... （ 〃 ）

■住民評価の視点

「確認状況」 6-3-1
「関心度」 6-3-2
「重要性」 6-3-3
「わかりやすさ」 6-3-4

6-2-1 各項目に対する住民の確認状況

point
- **「土石流危険渓流･崖崩れ危険箇所」に関しては、確認したとする回答が比較的少ないものの、そのほかの項目では「確認した」とする回答が 80%以上を占めている。**
- **若年層における各項目に関する確認状況の偏り、災害教育･災害伝承を通じた洪水の知識を有しない住民や災害に対する意識が低い住民の確認状況が悪いこと、などが目立つ。**

・図 6-5 は、桐生市洪水ハザードマップにおける掲載内容項目別の住民の確認状況を示したものである。
・「土石流危険渓流・崖崩れ危険箇所」に関しては、確認したとする回答が比較的少ないものの、そのほかの項目では「確認した」とする回答が 80%以上を占めている。
・「避難場所」について確認したとする回答の割合が最も多い。

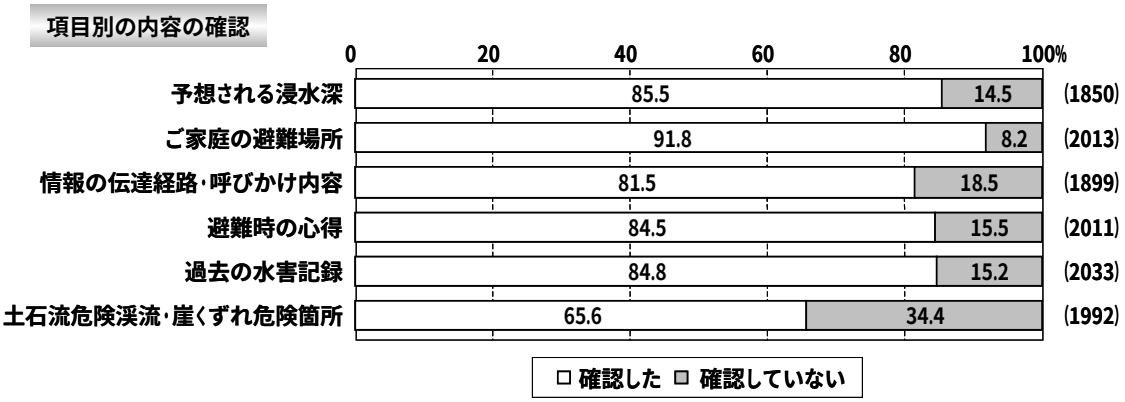
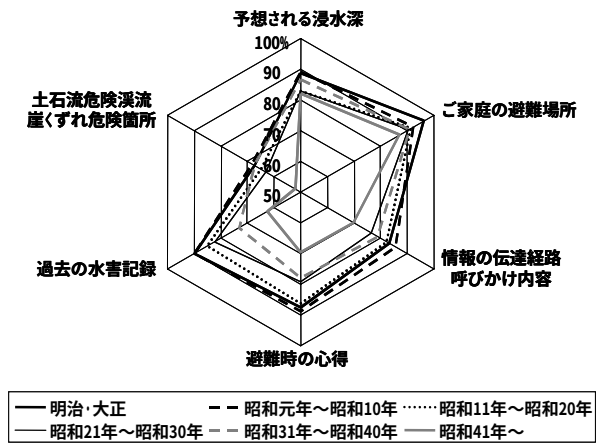


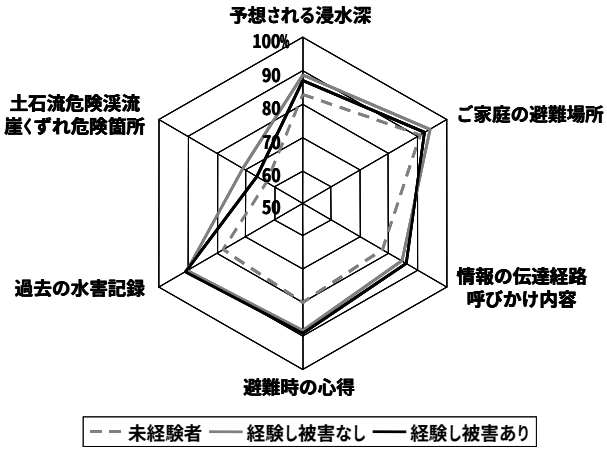
図 6-5 洪水ハザードマップの内容項目別に示す住民の確認状況

【内容項目別確認状況と諸属性との関係】

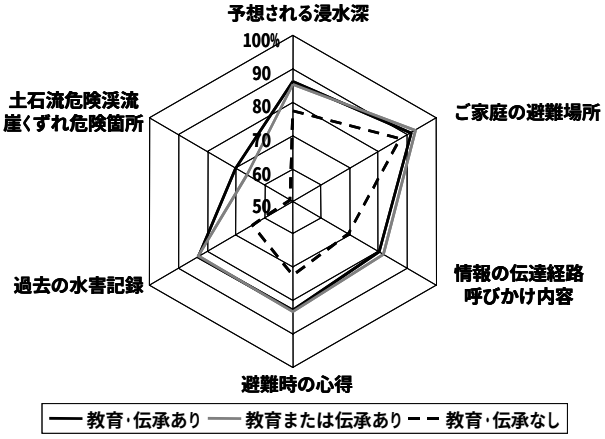
・図 6-6 は、桐生市洪水ハザードマップの各項目に関して「確認した」とする回答の割合を、(A)では回答者の生年別に、(B)ではカスリン台風の経験属性別に、(C)ではカスリン台風に関する災害教育や災害伝承の有無別に、(D)では洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深区分別に、(E)では第一回アンケート実施時点での洪水に対する意識の有無別に、(F)では第一回アンケート実施時点での防災訓練の参加意向別に、それぞれ示したものである。
・(A)において生年との関係をみると、いずれの年代の回答者も「予想される浸水深」や「ご家庭の避難場所」などの項目については確認したとする回答の割合が高い一方で、「過去の水害記録」等の項目では、若年層の回答者になるほどその割合は低い。
・(B)においてカスリン台風の経験属性との関係を見ると、被害の有無に関わらず経験者はいずれの項目についても確認したとする回答の割合が高く、一方、未経験者では「予想される浸水深」や「ご家庭の避難場所」などでは経験者と同様に確認したとする回答の割合が高いものの、その他の項目についてはその割合が低いものとなっている。
・(C)においてカスリン台風に関する災害教育･災害伝承の有無との関係をみると、災害教育と災害伝承ともに無い住民において、いずれの項目についても確認したとする回答の割合が低くなっている。
・(D)において洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深との関係を見ると、洪水ハザードマップ上で「2.0m 以上」の深い浸水深が示されている地域に居住する住民では、いずれの項目についても確認したとする回答の割合が高くなっている。
・(E)において第一回アンケート実施時点での回答者の洪水に対する意識の有無との関係を見ると、洪水に対して無関心な意識状態にあった回答者は、いずれの項目についても確認したとする回答の割合が低くなっている。
・(F)において第一回アンケート実施時点での防災訓練への参加意向との関係を見ると、強い参加意向を示していた回答者ほど、いずれの項目についても確認したとする回答の割合が高くなっている。



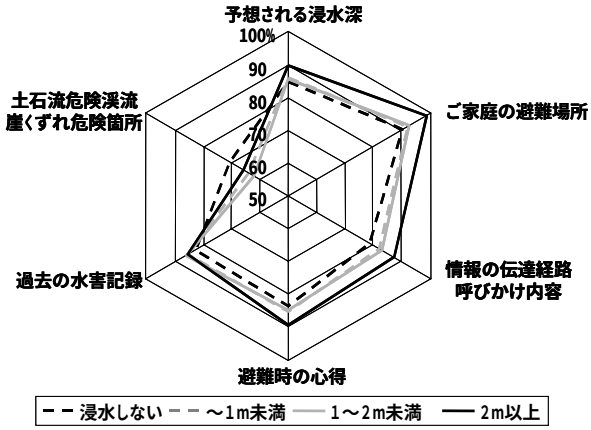
(A) 生年との関係



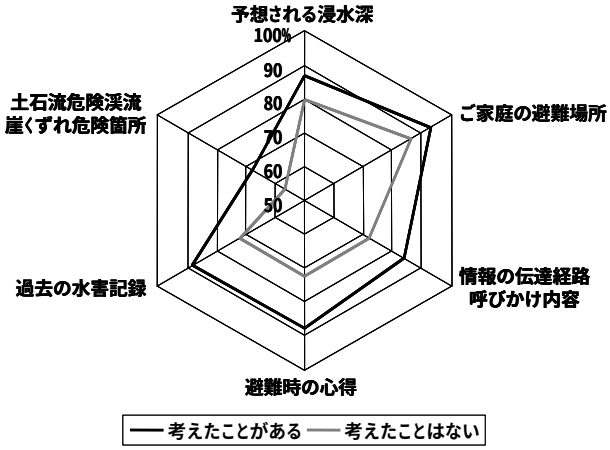
(B) カスリン台風の洪水経験との関係



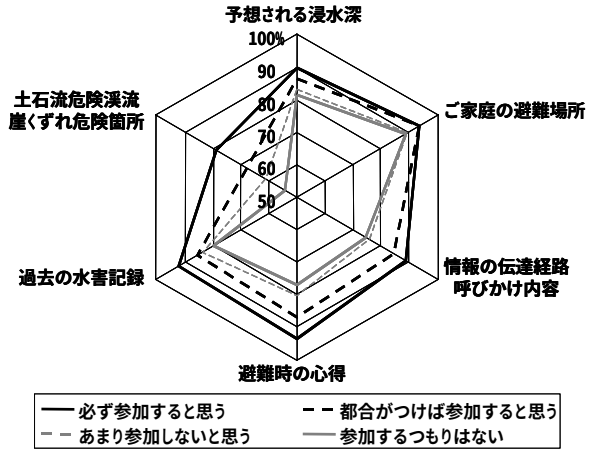
(C) カスリン台風に関する災害教育･災害伝承の有無との関係



(D) 洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深との関係



(E) 第一回アンケート実施時点における洪水に対する意識の有無との関係



(F) 第一回アンケート実施時点における防災訓練への参加意向との関係

図 6-6 内容項目別確認状況と諸属性との関係

6-2-2 各項目に対する住民の関心度

point
- **多くの住民が洪水ハザードマップに対して高い関心を示している。**
- **「土石流危険渓流･崖崩れ危険箇所」については関心が比較的低いものの、そのほかの各項目とも「大いに興味がある」「興味がある」とする回答が約 80%程度を占めており、住民の洪水ハザードマップに対する関心の高さが伺える。**
- **若年層における各項目への関心度の低さ、カスリン台風の未経験者の各項目に対する関心度の低さ、洪水の発生可能性に対して楽観的な認識をもつ住民の各項目に対する関心度の低さ、などが目立つ。**

・図 6-7 は、桐生市洪水ハザードマップにおける掲載内容項目別の住民の関心度に関する回答状況を示したものである。

・「土石流危険渓流・崖崩れ危険箇所」については関心が比較的低いものの、そのほかの各項目とも「大いに興味がある」「興味がある」とする回答が約 80%程度を占めており、住民の洪水ハザードマップに対する関心の高さが伺える。

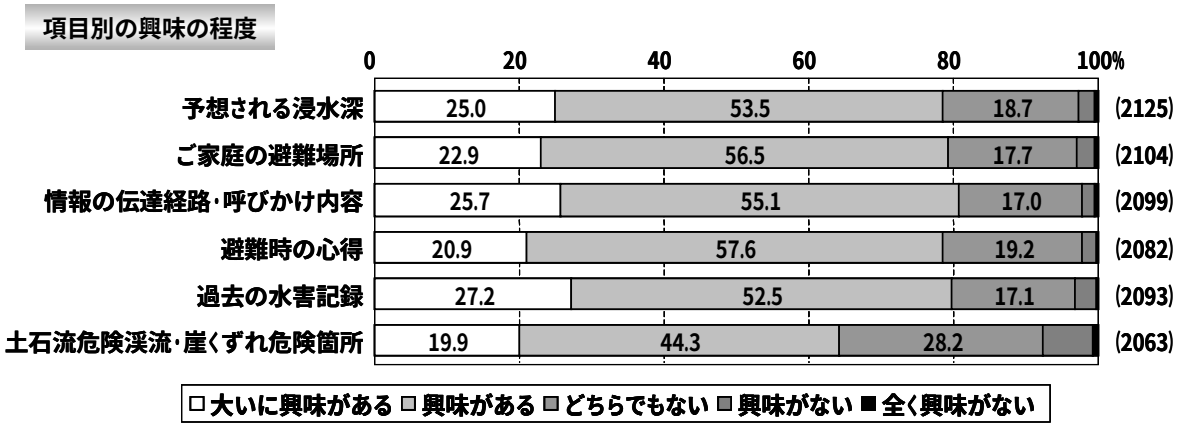


図 6-7 洪水ハザードマップの内容項目別に示す住民の関心度

【内容項目別関心度と諸属性との関係】

・図 6-8，6-9 は、桐生市洪水ハザードマップの各項目に関して「大いに興味がある」とする回答が占める割合を、(A)では回答者の生年別に、(B)ではカスリン台風の経験属性別に、(C)ではカスリン台風に関する災害教育や災害伝承の有無別に、(D)では洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深区分別に、(E)では第一回アンケート実施時点での洪水に対する意識の有無別に、(F)では第一回アンケート実施時点での防災訓練の参加意向別に、（G）では第一回アンケート実施時点での洪水発生可能性認識別にそれぞれ示したものである。
・(A)において生年との関係をみると、高齢者ほど各項目に対して大きな興味を示していることがわかる。
・(B)においてカスリン台風の経験属性との関係を見ると、被害の有無に関わらず経験者は、未経験者よりも、いずれの項目についても大きな興味を示していることがわかる。

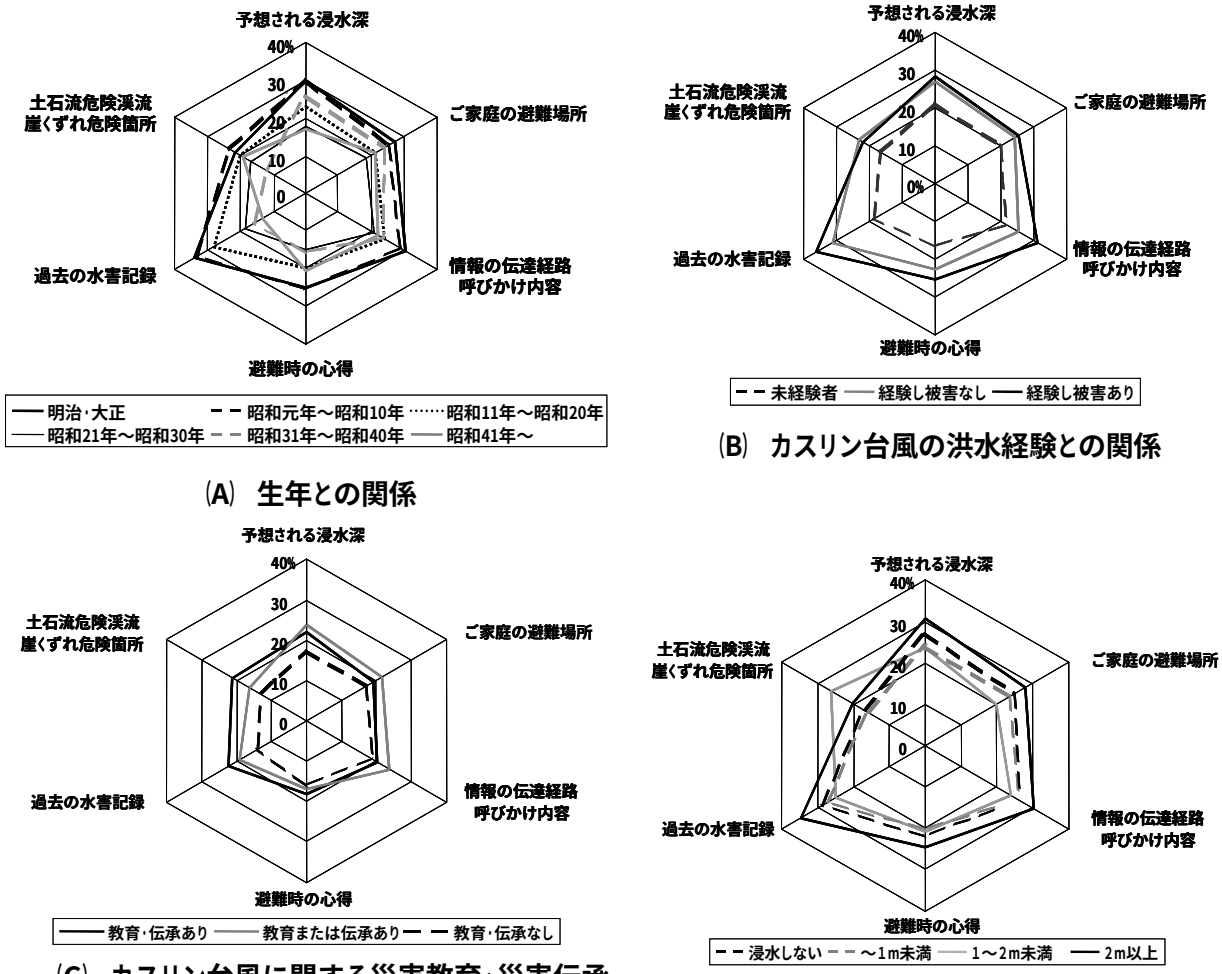
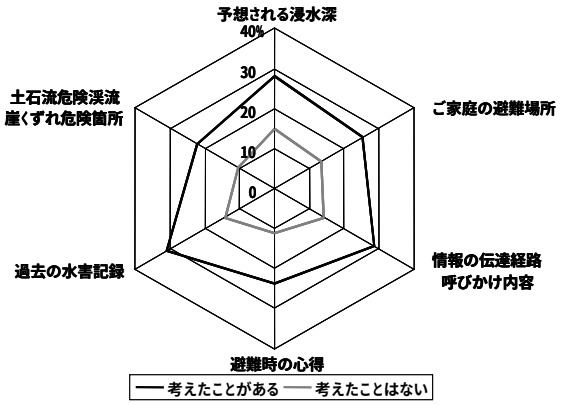
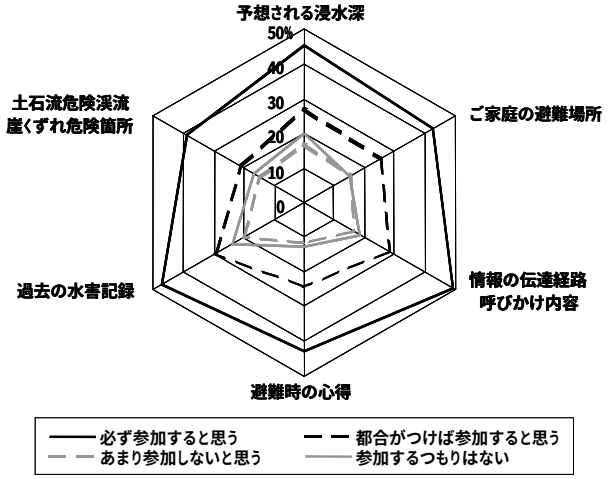


図 6-8 内容項目別関心度と諸属性との関係①

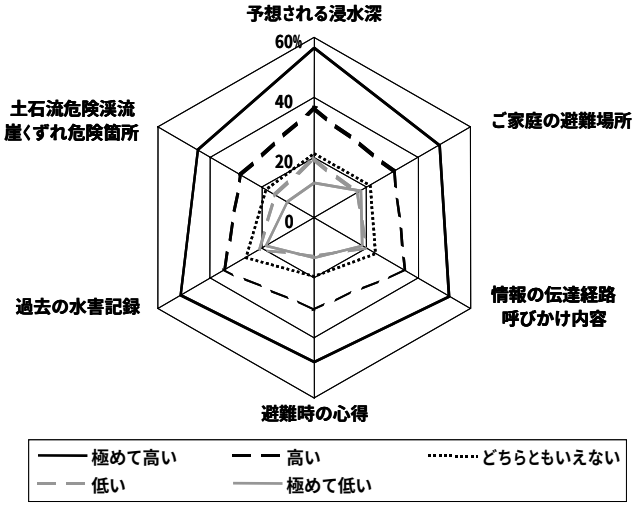
・(C)においてカスリン台風に関する災害教育･災害伝承の有無との関係をみると、災害教育と災害伝承ともに無い住民において、いずれの項目についても興味の程度は小さいものとなっている。
・(D)において洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深との関係を見ると、洪水ハザードマップ上で「2.0m 以上」の深い浸水深が示されている地域に居住する住民は、各項目に対して大きな興味を示していることがわかる。
・(E)において第一回アンケート実施時点での回答者の洪水に対する意識の有無との関係を見ると、洪水に対して無関心な意識状態にあった回答者は、いずれの項目についても興味の程度は低いものとなっていることがわかる。



⑴ 第一回アンケート実施時点における
洪水に対する意識の有無との関係



⑵ 第一回アンケート実施時点における
防災訓練への参加意向との関係



⑶ 洪水発生可能性認識との関係

図 6-9 内容項目別関心度と諸属性との関係②

・(F)において第一回アンケート実施時点での防災訓練への参加意向との関係を見ると、強い参加意向を示していた回答者ほど、いずれの項目についても大きな興味を示していることがわかる。
・(G)において第一回アンケート実施時点での洪水発生可能性認識との関係を見ると、洪水の発生可能性を高く認識していた住民ほど、いずれの項目についても大きな興味を示していることがわかる。

6-2-3 各項目に対する住民の重要性評価

point
- **多くの住民が洪水ハザードマップの重要性を高く評価している。**
- **「情報の伝達経路・呼びかけ内容」に対する重要性評価が最も高く、「土石流危険渓流・崖崩れ危険箇所」に対する重要性評価が最も低い。**
- **重要性の評価は、洪水ハザードマップに対する関心度と同様な傾向を示す。**
- **洪水発生可能性認識のような住民の意識的側面が、洪水ハザードマップに対する関心度や重要性評価を規定する大きな要因となっている。**

・桐生市洪水ハザードマップに掲載されている各内容項目に対する住民の重要性評価を示したものが図 6-10 である。
・各項目とも「非常に重要である」「重要である」とする回答が 90%近くを占めており、多くの住民が洪水ハザードマップ上の掲載項目についての重要性を強く認識している。
・「土石流危険渓流・崖くずれ危険個所」についての重要性評価は、他の項目に比べて低いものとなっている。

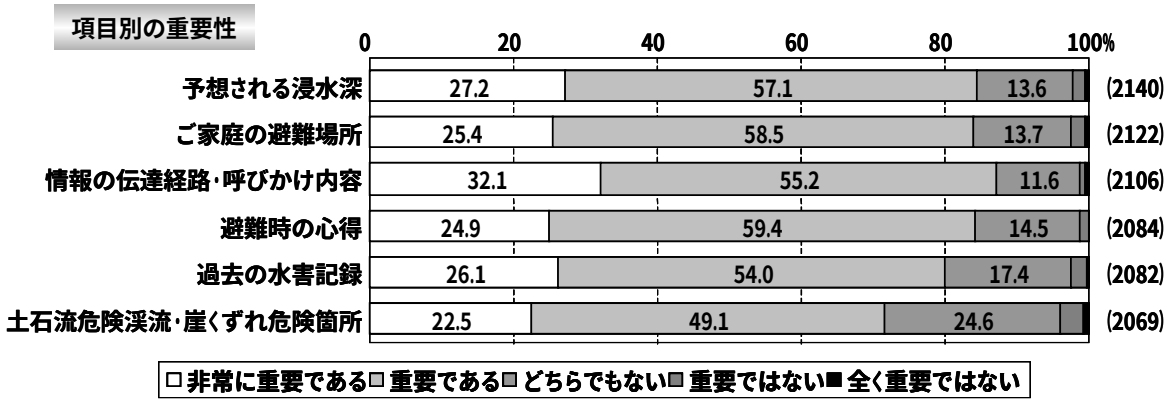
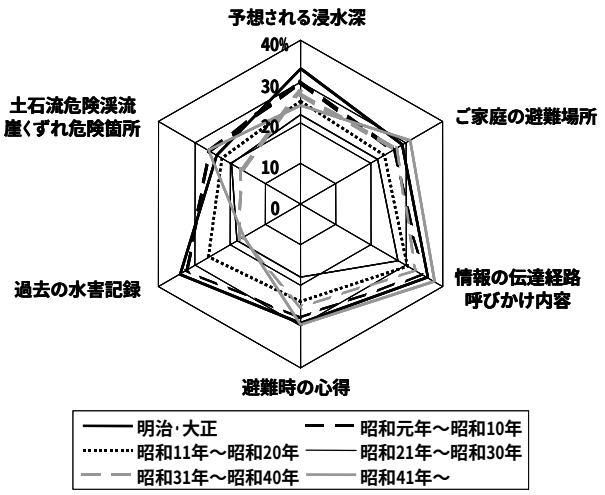


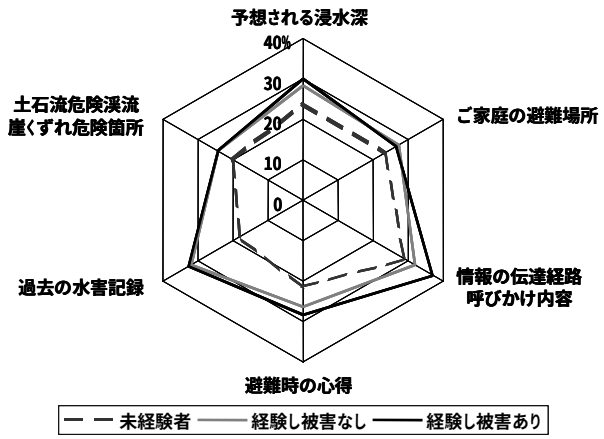
図 6-10 洪水ハザードマップの各内容項目に対する住民の重要性評価

【内容項目別重要性評価と諸属性との関係】

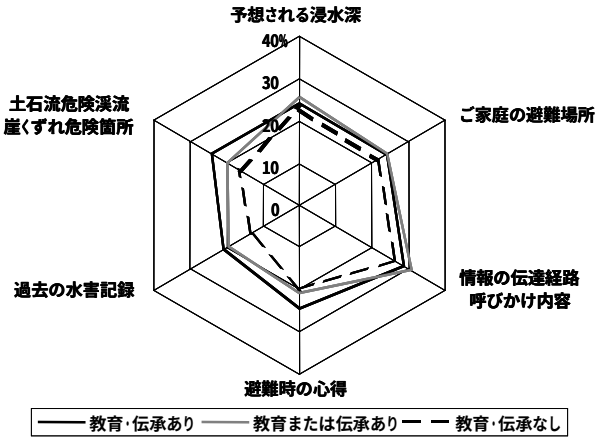
・図 6-11，6-12 は、桐生市洪水ハザードマップの各項目に関して「非常に重要である」とする回答の割合を、(A)では回答者の生年別に、(B)ではカスリン台風の経験有無別に、(C)ではカスリン台風に関する学校での災害教育や地域コミュニティでの災害伝承の有無別に、(D)では洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深別に、(E)では第一回アンケート実施時点での洪水に対する意識の有無別に、(F)では第一回アンケート実施時点での防災訓練の参加意向別に、(G)では第一回アンケート実施時点での洪水発生可能性認識別にそれぞれ示したものである。
・(A)において回答者の生年別との関係を見ると、「過去の水害記録」については、生年が異なることによる評価の違いは大きく、高齢者層ほどその重要性を高く評価する傾向にあることがわかる。その他の項目に関しても、概して高齢者層における評価が高いものとなっている。
・(B)においてカスリン台風の経験属性との関係をみると、未経験者における各項目に対する評価は、経験者と比べて低いものとなっている。
・(C)においてカスリン台風に関する災害教育・災害伝承の有無との関係を見ると、災害教育・災害伝承のいずれも有しない住民の各項目に対する評価は比較的低いものとなっている。
・(D)において洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深との関係を見ると、いずれの項目についても、2m 以上の浸水深が示された地域に居住する住民における重要性評価が高いものとなっている。
・(E)において第一回アンケート実施時点での洪水に対する意識の有無との関係をみると、洪水について考えたことがある回答者の各項目に対する重要性評価は、考えたことがないとする回答者に比べて大幅に高い評価となっていることがわかる。
・(F)において第一回アンケート実施時点での防災訓練への参加意向との関係をみると、参加意向の違いが各項目に対する重要性評価へ与える影響は大きく、明確に参加意向を示す住民の各項目に対する重要性評価は高いものとなっている。
・(G)によると、第一回アンケート実施時点での洪水発生可能性の違いが各項目に対する重要性評価へ与える影響は大きく、洪水の発生可能性を高く認識する住民ほど各項目に対する重要性評価は高いものとなっている。



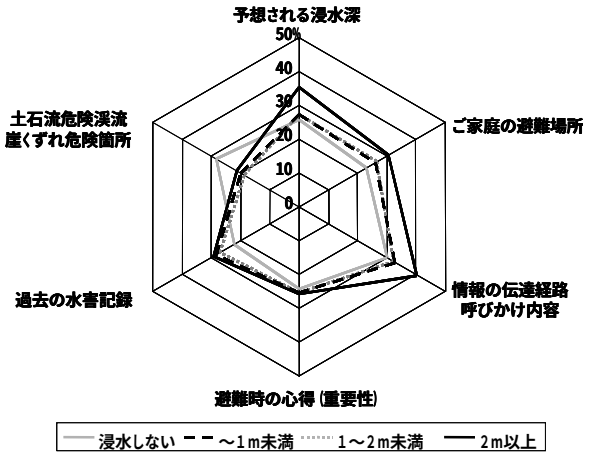
(A) 生年との関係



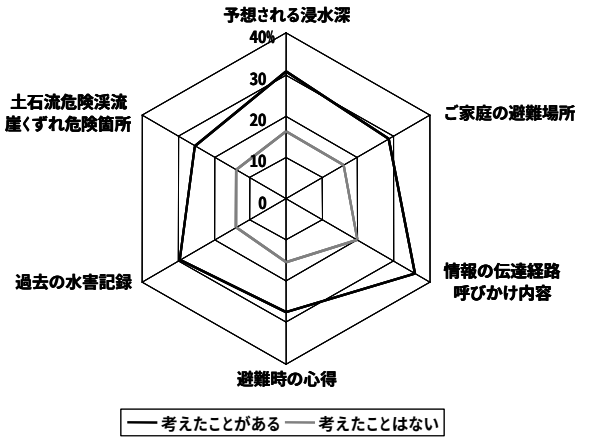
(B) カスリン台風の経験との関係



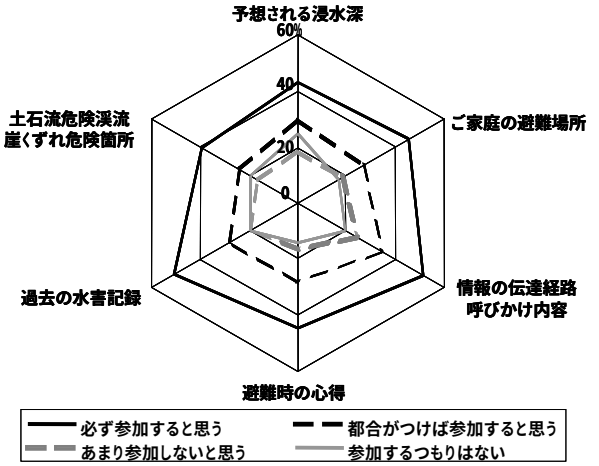
(C) カスリン台風に関する災害教育･災害伝承の有無との関係



(D) 洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深との関係

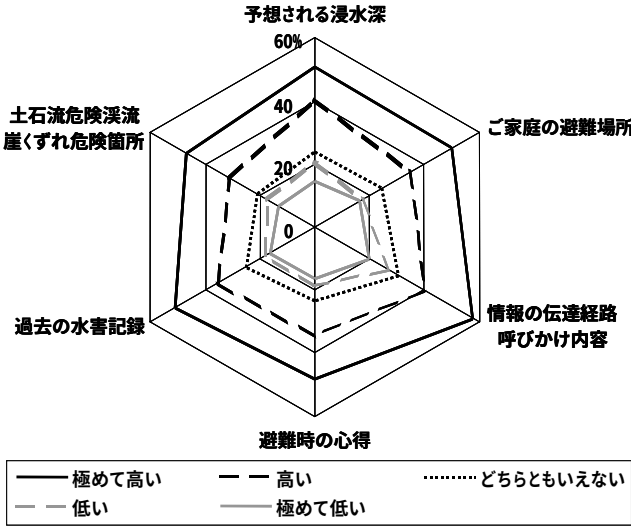


(E) 第一回アンケート実施時点における洪水に対する意識の有無との関係



(F) 第一回アンケート実施時点における防災訓練への参加意向との関係

図 6-11 内容項目別の重要性評価と諸属性との関係 (1)



(G) 洪水発生可能性認識との関係

図 6-12 内容項目別の重要性評価と諸属性との関係 (2)

6-2-4 各項目別に示す住民のわかりやすさの評価

point
- **桐生市洪水ハザードマップは、多くの住民に比較的わかりやすいと評価されている。**
- **わかりやすさでは、「情報の伝達経路・呼びかけ内容」に対する評価が最も高く、「土石流危険渓流・崖崩れ危険箇所」に対する評価が最も低く、関心度や重要性に対する評価と同様の傾向にあることがわかる。**

・ここでは、桐生市洪水ハザードマップに掲載されている各内容項目に対する住民のわかりやすさの評価の実態を示す。

・図 6-13 によれば、いずれの項目とも「わかりやすい」、「どちらかというとわかりやすい」と回答する住民の割合がおよそ 60%以上を占め、「わかりにくい」、「どちらかというとわかりにくい」とする回答は 10%前後にとどまった。土石流危険渓流・崖崩れ危険箇所に関しても、わかりにくいとする回答は少ないものとなった。

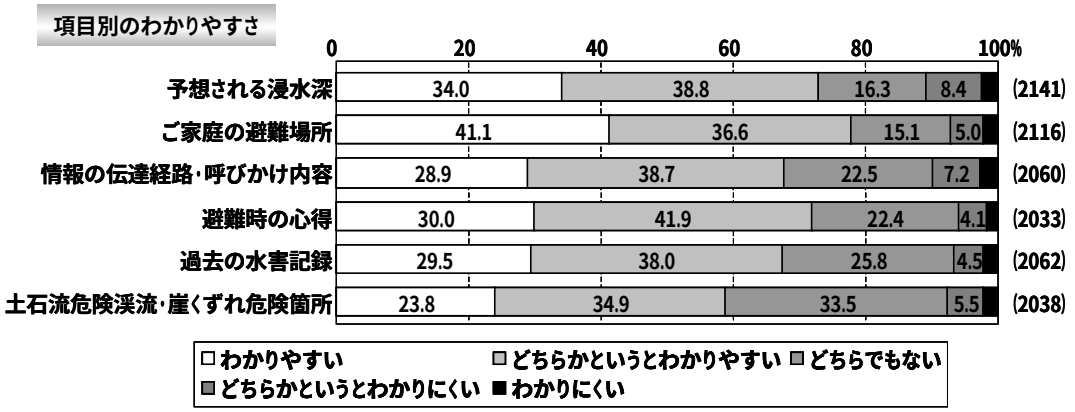


図 6-13 洪水ハザードマップの内容項目別に示す住民のわかりやすさの評価

【内容項目別わかりやすさの評価と諸属性との関係】

・図 6-14, 6-15 は、桐生市洪水ハザードマップの各項目に関して「わかりやすい」とする回答が占める割合を、(A)では回答者の生年別に、(B)ではカスリン台風の経験有無別に、(C)ではカスリン台風に関する学校での災害教育や地域コミュニティでの災害伝承の有無別に、(D)では洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深別に、(E)では第一回アンケート実施時点での洪水に対する意識の有無別に、(F)では第一回アンケート実施時点での防災訓練の参加意向別に、（G）では第一回アンケート実施時点での洪水発生可能性認識別にそれぞれ示したものである。

・(A)において生年との関係をみると、高齢者ほど各項目に対してわかりやすいと評価していることがわかる。

・(B)においてカスリン台風の経験属性との関係を見ると、未経験者における各項目に対する評価は、経験者と比べて低いものとなっている。

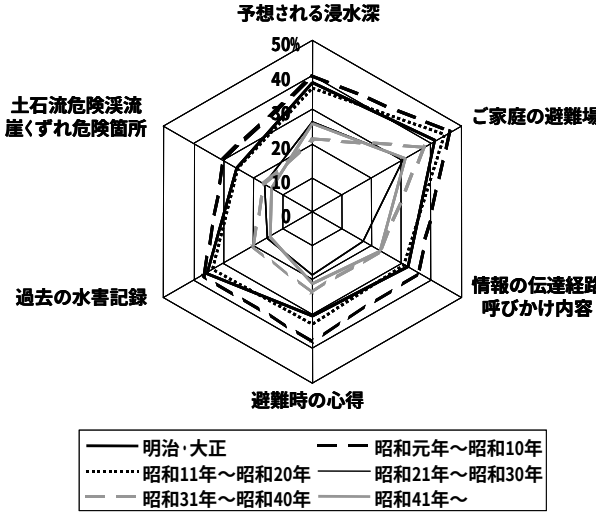
・(C)においてカスリン台風に関する災害教育・災害伝承の有無との関係では、災害教育または災害伝承のいずれかを有する住民において、各項目に対するわかりやすさの評価は高いものとなっている。

・(D)において洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深との関係を見ると、ここでは、2m以上の浸水深が示された地域に居住する住民におけるわかりやすさの評価が低くなっている。

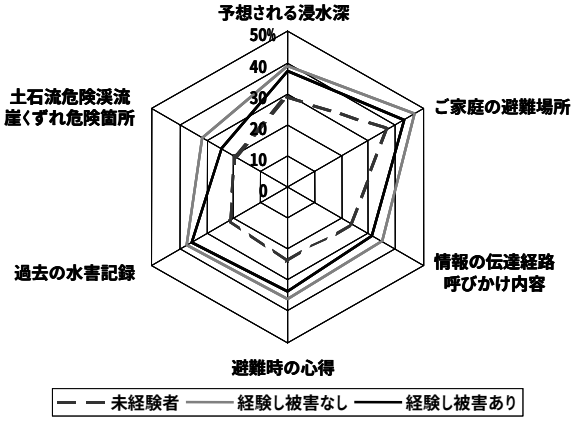
・(E)において第一回アンケート実施時点での洪水に対する意識の有無との関係をみると、洪水について考えたことがある回答者の各項目に対するわかりやすさの評価が高くなっている。

・(F)において第一回アンケート実施時点での防災訓練への参加意向との関係をみると、明確に参加意向を示す住民の各項目に対するわかりやすさの評価が高いものとなっている。

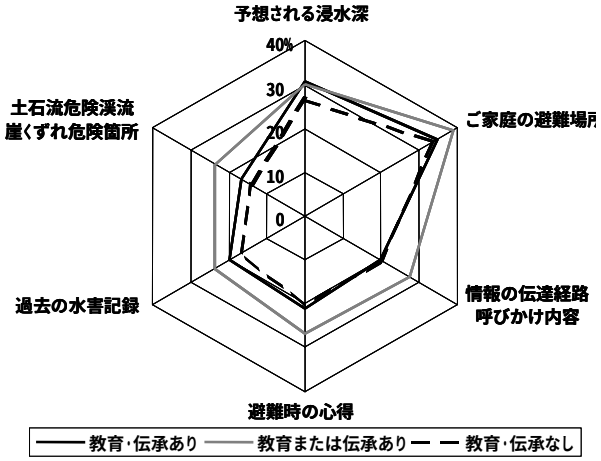
・(G)によると、第一回アンケート実施時点での洪水発生可能性の違いが各項目に対するわかりやすさの評価へ与える影響は明確ではない。



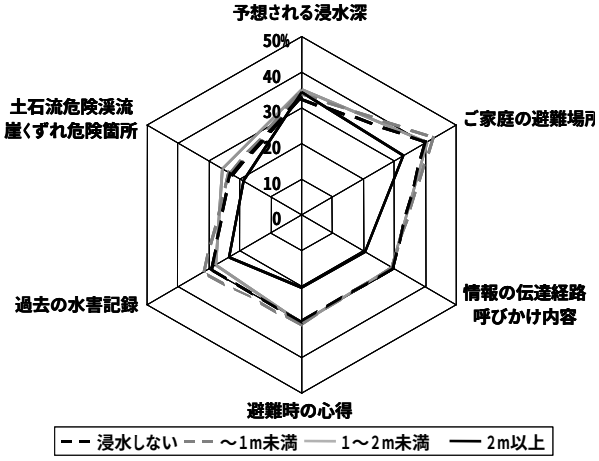
(A) 生年との関係



(B) カスリン台風の洪水経験との関係

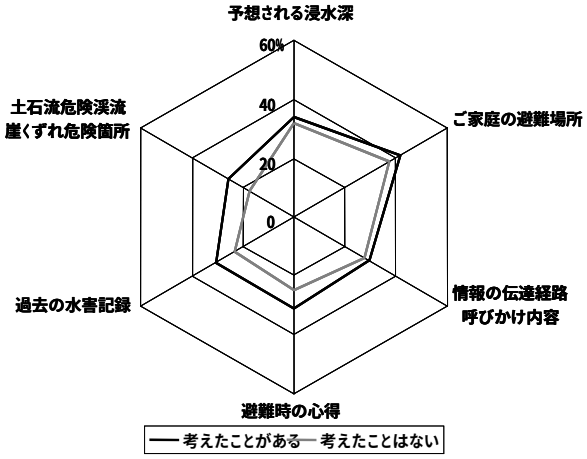


(C) カスリン台風に関する災害教育･災害伝承の有無との関係

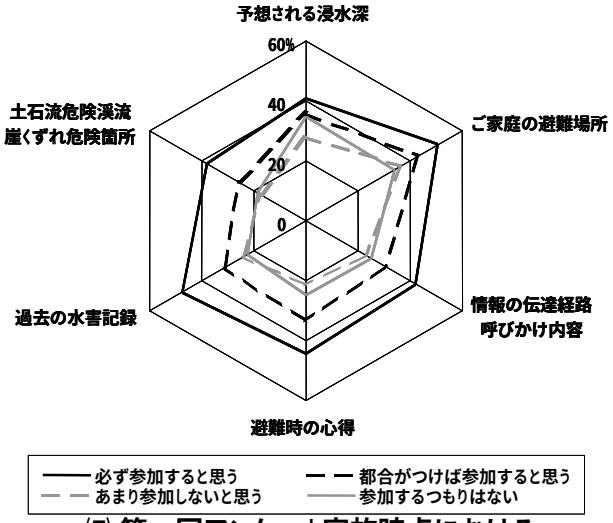


(D) 洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深との関係

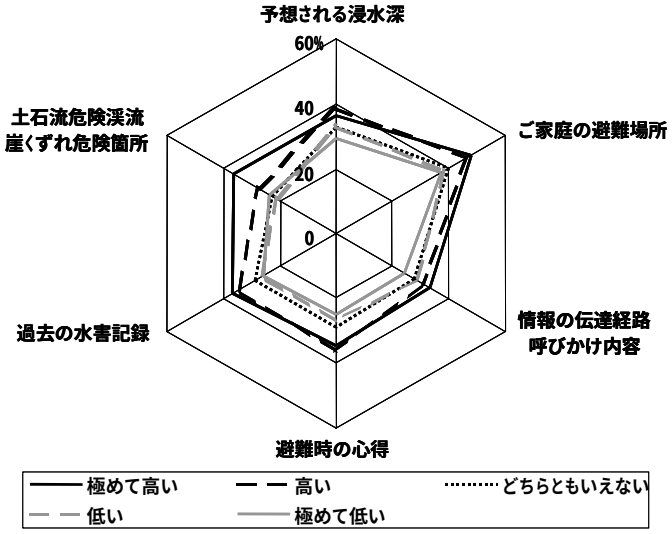
図 6-14 内容項目別のわかりやすさの評価と諸属性との関係 (1)



(E) 第一回アンケート実施時点における
洪水に対する意識の有無との関係



(F) 第一回アンケート実施時点における
防災訓練への参加意向との関係



(G) 洪水発生可能性認識との関係

図 6-15 内容項目別のわかりやすさの評価と諸属性との関係 (2)

6-2-5 桐生市洪水ハザードマップの全体評価

point
- **80%以上の住民が、桐生市洪水ハザードマップを洪水に関する情報提供の手段として有効であると評価している。**
- **洪水ハザードマップによる被害軽減効果を最大限に引き出すためには、掲載されている情報の正しい理解のみにとどまらず、住民が洪水ハザードマップを平常時･洪水時においてどのように活用していくかが、今後の重要な課題となる。**

・ここでは、桐生市洪水ハザードマップに対する総合的な評価として、住民の洪水ハザードマップに対する有効性評価に関する回答を示す。
・集計結果の図 6-16 によると、若年層において洪水ハザードマップの総合的な有効性評価が低くなる傾向にあるものの、全体としては、80%以上の住民に洪水ハザードマップは有効であると評価されている。

・本節では、住民の洪水ハザードマップに対する評価は比較的高いものである実態が把握されたが、洪水ハザードマップの公表がソフト面での治水対策としてより効果的であるためには、住民が洪水ハザードマップに掲載されている情報を正しく理解し、そのもとで、住民一人一人が自らの災害意識を高揚し、適切な災害対応行動を行うなど、住民が洪水ハザードマップを平常時･洪水時においてどのように活用していくかがより重要な課題となる。

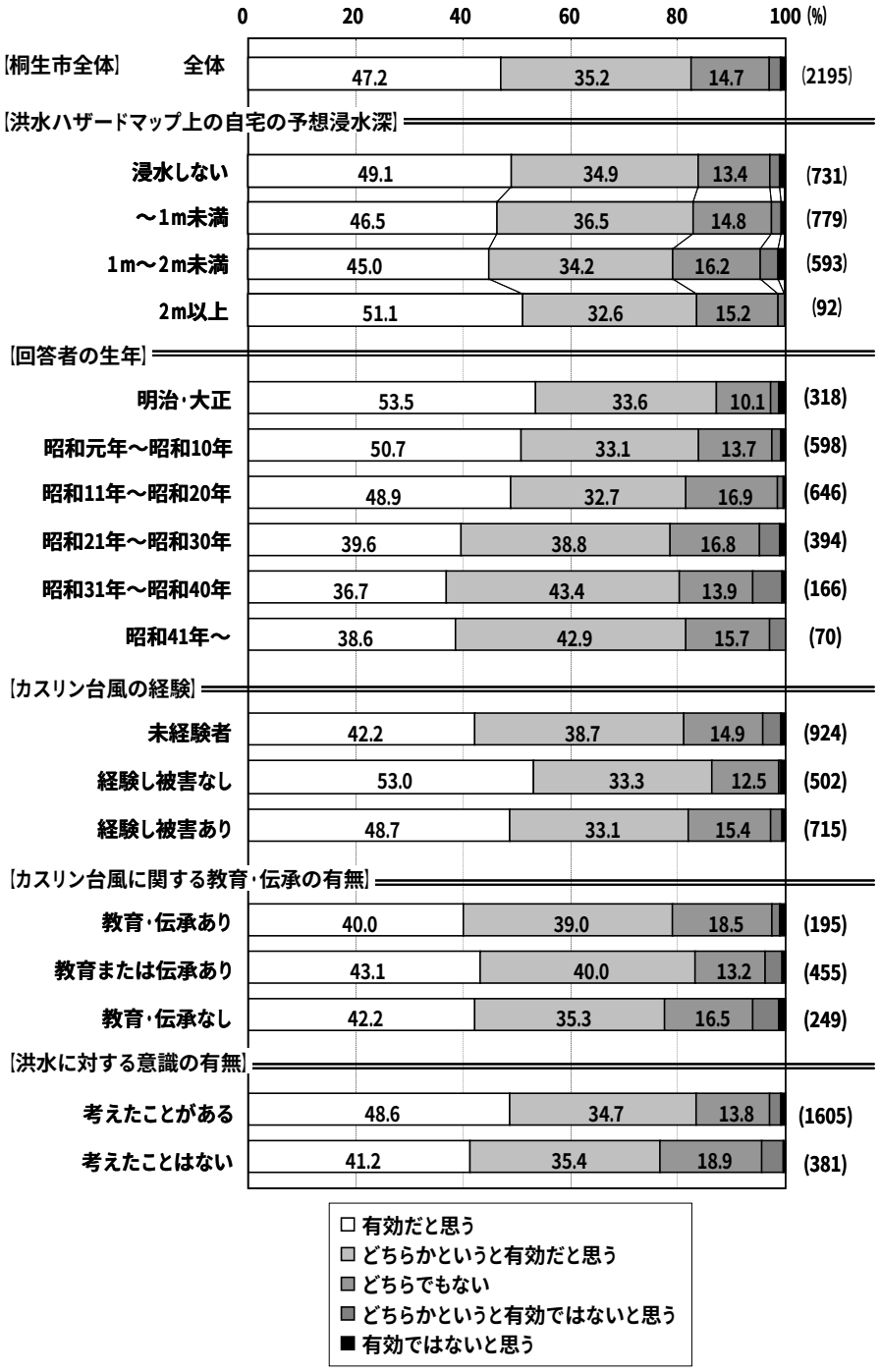


図 6-16　洪水ハザードマップに対する有効性評価

6-3 桐生市洪水ハザードマップに示される指定避難場所に対する評価

ここでは、桐生市洪水ハザードマップに示されている指定避難場所に対する住民評価の実態を把握する。住民評価の実態を把握するにあたり、まず、6-3-1 において、洪水ハザードマップが公表後の時点（第二回アンケート実施時点）における自分の指定避難場所の読み取り状況を把握する。次に、6-3-2 では、避難所の必要性と、住民が読み取った自分の避難場所に対する評価を、安全性、所要時間、自宅からの距離、避難経路の安全性、そして総合評価の 5 つの観点から把握する。最後に、6-3-2（2）で、洪水ハザードマップに示される洪水発生時における自分の避難場所への避難意向を把握する。

6-3-1 洪水ハザードマップに示される指定避難場所の読み取り状況

桐生市洪水ハザードマップでは、各世帯に直接関わる情報の一つとして、洪水発生時における避難場所を行政区単位で指定した「水害時の指定避難場所」を明示している。そこでここでは、桐生市洪水ハザードマップに示される各世帯の指定避難場所についての、住民の読み取り状況を把握する。

point
- **多くの住民（約 72%）は、桐生市洪水ハザードマップ上に示される自分の指定避難場所を正しく読み取っている。**
- **洪水ハザードマップに対して高い関心をもって閲覧している住民、重要性の評価が高い住民、などにおいては指定避難場所を正しく読み取る率が高い。**

・表 6-1 は、洪水ハザードマップ公表後において住民が洪水ハザードマップから読み取った指定避難場所を住民の居住する行政区別にまとめたものである。また、この結果をもとに、洪水ハザードマップで指定される避難場所を正しく読み取った住民（表 6-1 の灰色での塗りつぶし部分）の占める割合をグラフ化したものが図 6-17 である。

・これによると、多くの住民は、自分の行政区の指定避難場所を洪水ハザードマップ上で正しく読み取っていることがわかる。しかし、25%程の回答者は、自分が指定されている避難場所を誤って読み取っている。

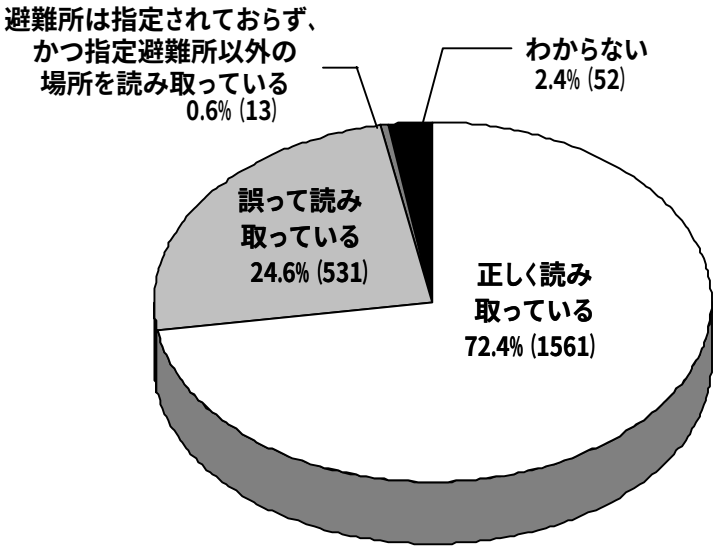


図 6-17　洪水ハザードマップに示される指定避難場所の読み取り状況

表 6-1 指定避難場所の読み取り状況

回答者の居住地 ＼ 洪水ハザードマップ上の避難場所	昭和小学校	昭和中学校	南小学校	南中学校	元宿保育園	西小学校	北幼稚園	北中学校	桐生工業高校	北小学校	境野小学校	境野中学校	桜木中学校	広沢中学校	桜木小学校	相生小学校	菱小学校	郷土資料展示ホール	市民文化会館	地場産業振興センター	保健福祉会館	桐生水質浄化センター	一本木会館	わからない	その他	合計	正解率
稲荷町	6																								1	7	85.7%
錦町1丁目	30	1																	5	1				1	4	42	71.4%
美原町	9																								2	11	81.8%
清瀬町	9	2																							1	12	75.0%
元宿町	18				14																				1	33	54.5%
錦町2丁目	13	12																	7					1		33	36.4%
新宿1丁目	3	17	16								1								1						1	39	43.6%
境野町2丁目			29	7				1			8	1												1		47	61.7%
境野町3丁目			13	3							10														1	27	48.1%
境野町1丁目			2	24																				1	1	28	85.7%
境野町4丁目			1	30							12															43	69.8%
堤町3丁目					24	4																		2	8	38	63.2%
本町2丁目						5				11																16	31.3%
本町3丁目						7				3																10	70.0%
本町4丁目						10																				10	100.0%
宮本町1丁目						8				1																9	88.9%
仲町2丁目						15				1								3			1				2	22	68.2%
東4丁目			1			28				1								2			2			1	3	38	73.7%
東5丁目	1					63	1		1	2							1	2		1				4	1	77	81.8%
本町1丁目						1	3	2	1	5																12	25.0%
横山町							1			2	1															4	25.0%
西久方町2丁目							1			2																3	33.3%
東久方町1丁目								9	1	2															1	13	69.2%
天神町1丁目							1	2																	1	4	50.0%
天神町2丁目								16		1															1	18	88.9%
天神町3丁目								110	4	3														2	7	126	87.3%
東久方町2丁目								1	7	3															1	12	58.3%
東久方町3丁目										5															1	6	83.3%
仲町1丁目						6	1			39							1		1					3	1	52	75.0%
東1丁目							1	1		35							1							1	1	40	87.5%
東2丁目						4				52							1	1						2	1	61	85.2%
東3丁目						3	1			17														1		22	77.3%
境野町6丁目				1							58	8												1	1	69	84.1%
境野町5丁目											14	15												1	2	32	46.9%
境野町7丁目											11	57												1		69	82.6%
桜木町													4		1											5	80.0%
広沢町1丁目													33	2	1									2	2	40	82.5%
広沢町4丁目														52											1	53	98.1%
広沢町5丁目														55											2	57	96.5%
広沢町6丁目														48	1							1	2	2	2	56	85.7%
広沢町間ノ島														22											1	23	95.7%
相生町1丁目													4		83	1								3	6	97	85.6%
相生町2丁目															8	148			1					7	12	176	84.1%
菱町1丁目											3						13								1	17	76.5%
菱町3丁目																	37								2	39	94.9%
菱町4丁目								1	2								103							1	10	117	88.0%
東6丁目			2	1	1		1											22			1			2	7	37	59.5%
東7丁目			3															15	2		1			1	3	25	60.0%
新宿2丁目	1		11	1															9						1	23	39.1%
新宿3丁目			8	12															14					1		35	40.0%
三吉町1丁目																			4							4	100.0%
三吉町2丁目	1		11																17						1	30	56.7%
小梅町			8	1															10					1	1	21	47.6%
琴平町				6															4							10	40.0%
浜松町2丁目	1		13											1					3						1	19	15.8%
織姫町	1	1																	3	4						9	44.4%
錦町3丁目	2	3																	6	12						23	52.2%
本町5丁目																		1			1					2	50.0%
仲町3丁目			1															4			17	1		2	1	26	65.4%
旭町																					1					1	100.0%
本町6丁目																					7					7	100.0%
川岸町																					1				1	2	50.0%
巴町2丁目	1				1																2					4	50.0%
浜松町1丁目			28	1															1		25			2		57	43.9%
広沢町7丁目																						5	6			11	100.0%
その他					2	20										2			1		3			5	13	46	
合計	96	36	147	87	42	174	11	143	16	185	118	81	41	180	94	151	157	50	89	18	62	7	8	52	112	2157	72.4%

(無回答：101，非該当：209)

【洪水ハザードマップに示される指定避難場所の読み取り状況と住民評価との関係】

・図 6-18 は、洪水ハザードマップに示される指定避難場所の読み取り状況を、桐生市洪水ハザードマップに示される水害時の避難場所に対する住民の関心度別、重要性評価別、わかりやすさの評価別に、それぞれ示したものである。
・これによると、水害時の避難場所に対する関心度、重要性評価、わかりやすさの評価が高い住民ほど、指定避難場所を正しく読み取っており、住民が洪水ハザードマップの掲載内容を正しく読み取るか否かには、このような住民の関心度や重要性評価、わかりやすさなどが少なからず影響しているものと思われる。

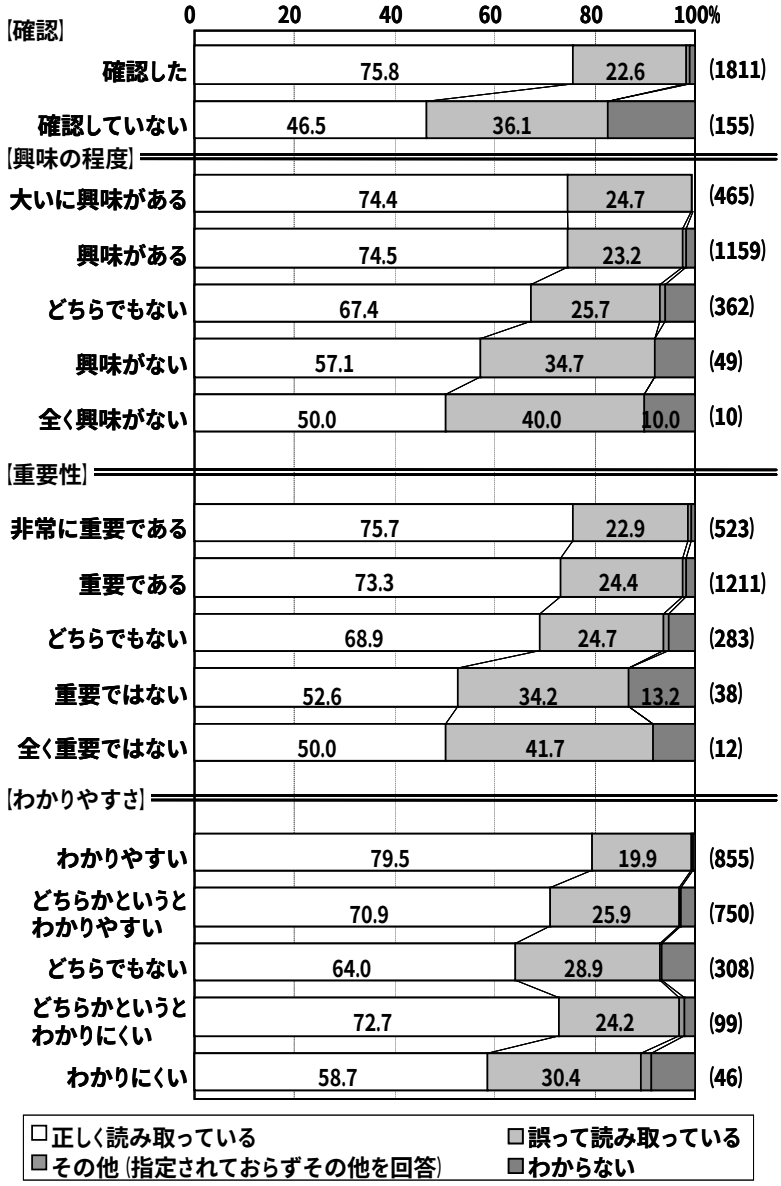


図 6-18 洪水ハザードマップに示される指定避難場所の読み取り状況と「水害時の避難場所」に対する住民評価との関係

6-3-2 指定避難場所に対する評価と避難意向

ここでは、洪水ハザードマップ上で指定された自分の居住地域の指定避難場所に対する住民評価の実態を、(1)では、指定避難場所の安全性、指定避難場所までの所要時間、指定避難場所までの距離、指定避難場所までの避難経路の安全性、指定避難場所に対する総合評価の５つの評価項目から把握し、また、(2)では、洪水ハザードマップ上で指定されている自分の避難場所に対する避難意向の実態を把握する。なお、ここでの集計は、自分の居住地の指定避難場所を洪水ハザードマップ上で正しく読み取った住民を対象に行うものとする。

point
- **住民の指定避難場所に対する評価や、指定避難場所への避難意向には、その避難場所への避難に要する距離が最も大きな規定要因として作用している。**
- **特に、避難場所までの避難距離が1km を越えるような場合には、住民の評価は顕著に低く、受容の範囲を越えていることが考えられる。**

（1）指定避難場所に対する評価の実態

・図 6-19 は､洪水ハザードマップ上で指定された自分の居住地の避難場所に対する評価を、指定避難場所の安全性、指定避難場所までの所要時間、指定避難場所までの距離、指定避難場所までの避難経路の安全性、総合評価の 5 つの観点からみたものである。

・これによると、避難場所の安全性に関しては、多くの住民が比較的高く評価している。それに対して、避難場所までの所要時間や距離、避難経路の安全性といった項目については「悪い」、「どちらかというと悪い」とする回答が多く見られ、特に所要時間や距離の項目においては「良い」、「どちらかというと良い」との回答を上回る結果となっている。

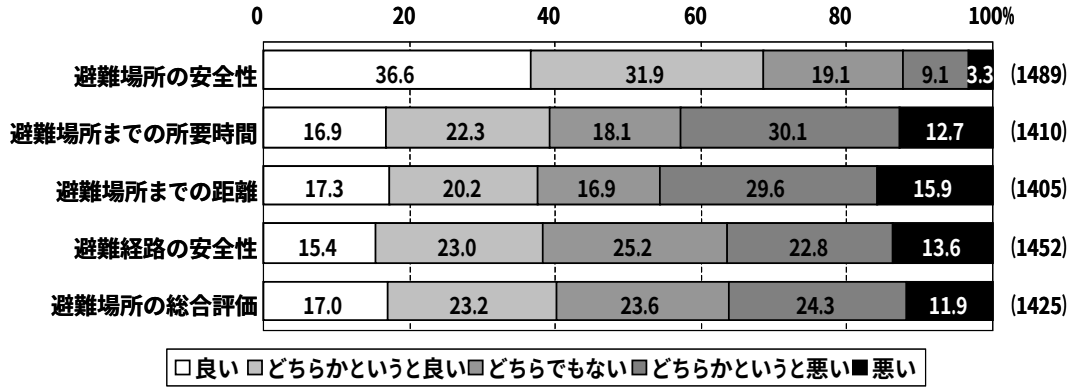


図 6-19 指定避難場所に対する住民評価

【指定避難場所に対する住民評価と避難距離との関係】

・避難場所の安全性に関する評価と比較して、総合評価が低い傾向にあることは、避難場所までの所要時間や距離に関する評価が、総合評価に影響していることが考えられる。
・そこで、自分の行政区から指定避難場所までの距離との関係のもとで、避難場所の安全性、避難場所までの所要時間、避難場所までの距離、避難場所までの避難経路の安全性、総合評価という５つの観点からの避難場所に対する住民評価の回答構成を示したものが図6-20である。
・これによると、指定避難場所までの距離と、避難場所に対する５つの視点からの住民評価との関係は、避難場所の安全性についての住民評価における連動性は比較的小さいものの、その他の観点からの住民評価においては、避難距離が長いほど住民評価は顕著に低くなる傾向を読み取ることができる。このことから、住民の指定避難場所に対する評価には、避難場所までの避難距離が大きな規定要因として作用していることがわかる。

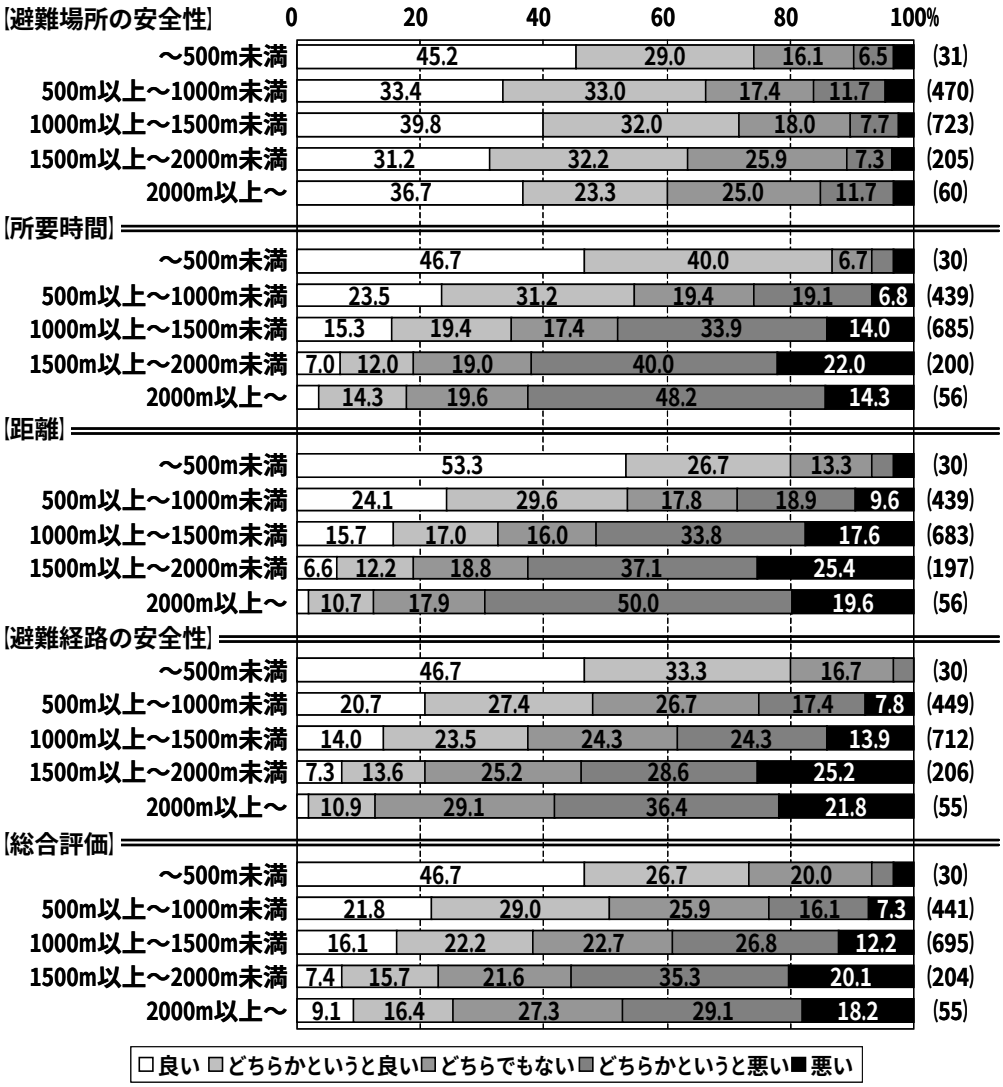


図 6-20 指定避難場所に対する住民評価と避難距離との関係

（2） 指定避難場所への避難意向

・洪水ハザードマップ上に示される指定避難場所に対する住民評価は、前述のような 5 つの観点からの評価項目を背景として、実際の洪水発生時を想定した場合におけるその避難場所への避難意向に、顕著に現れてくるものと思われる。そこで、ここでは、住民の洪水発生時の避難を想定した場合の、指定避難場所への避難意向について把握する。

・表 6-2 は、指定避難場所への住民の避難意向を、その避難場所別に求めたものである。これをもとに、回答者全体についての洪水ハザードマップに示される指定避難場所への避難意向の回答構成をグラフ化したものが、図 6-21 である。

・これによると、洪水ハザードマップ上で指定された避難場所へ避難する意向を示す住民は約 60%にとどまり、半数弱の住民が指定された避難場所へは避難したくないと考えている様子がわかる。また、指定避難場所が「南小学校」「昭和中学校」の地区では、指定避難場所よりも自宅付近に別の避難場所が存在しており、避難意向率が特に低いものとなっている。

表 6-2 指定避難場所別の住民の避難意向

		避難場所への避難意向			
		避難する	避難しない	合計	避難意向率
指定避難場所	昭和小学校	46	25	71	64.8%
	昭和中学校	10	18	28	35.7%
	南小学校	11	30	41	26.8%
	南中学校	33	18	51	64.7%
	元宿保育園	10	13	23	43.5%
	西小学校	71	62	133	53.4%
	北幼稚園	4	1	5	80.0%
	北中学校	85	47	132	64.4%
	桐生工業高校	5	2	7	71.4%
	北小学校	86	59	145	59.3%
	境野小学校	44	12	56	78.6%
	境野中学校	40	28	68	58.8%
	桜木中学校	33	4	37	89.2%
	広沢中学校	112	56	168	66.7%
	桜木小学校	58	23	81	71.6%
	相生小学校	96	44	140	68.6%
	菱小学校	83	68	151	55.0%
	郷土資料展示ホール	16	21	37	43.2%
	市民文化会館	24	36	60	40.0%
	地場産業振興センター	10	6	16	62.5%
	保険福祉会館	31	20	51	60.8%
	桐生水質浄化センター･一本木会館	7	4	11	63.6%
合計		915	597	1512	60.5%

（無回答：49，非該当：906）

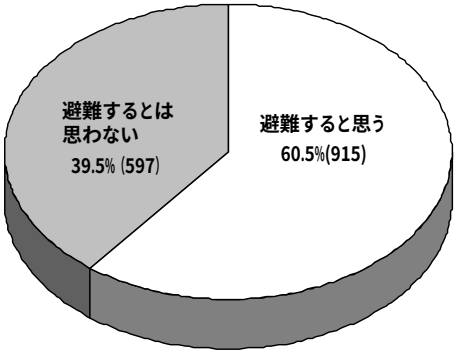


図 6-21 指定避難場所に対する避難意向

【指定避難場所に対する避難意向と諸属性との関係】

・ここでは、指定避難場所に対する住民の避難意向を、指定避難場所までの避難距離別、指定避難場所の浸水エリアに対する位置別、指定避難場所の必要性に対する考え方別、指定避難場所に対する総合評価別に、それぞれ図 6-22 において見てみる。
・これによると、指定避難場所までの避難距離が遠くなるほど、その指定避難場所への避難意向を示す住民は顕著に少なくなる傾向にあり、これと連動して、避難場所に対する総合評価との関係においても、同様の傾向をみることができる。これらの結果より、洪水ハザードマップにおける指定避難場所が住民に受容されるためには、避難に要する距離が大きな規定要因として作用しているものと考えられる。
・次に、指定避難場所が必要だと考えている住民と比較して、必要ではないと考えている住民の避難するとは思わないとの回答の割合が顕著に多いことがわかる。
・また、避難場所までの距離に比べるとその傾向は弱いものではあるが、避難場所の示されている位置が浸水エリアの内外であるかにより、その指定避難場所への避難意向を示す住民の割合に変化をみることができる。

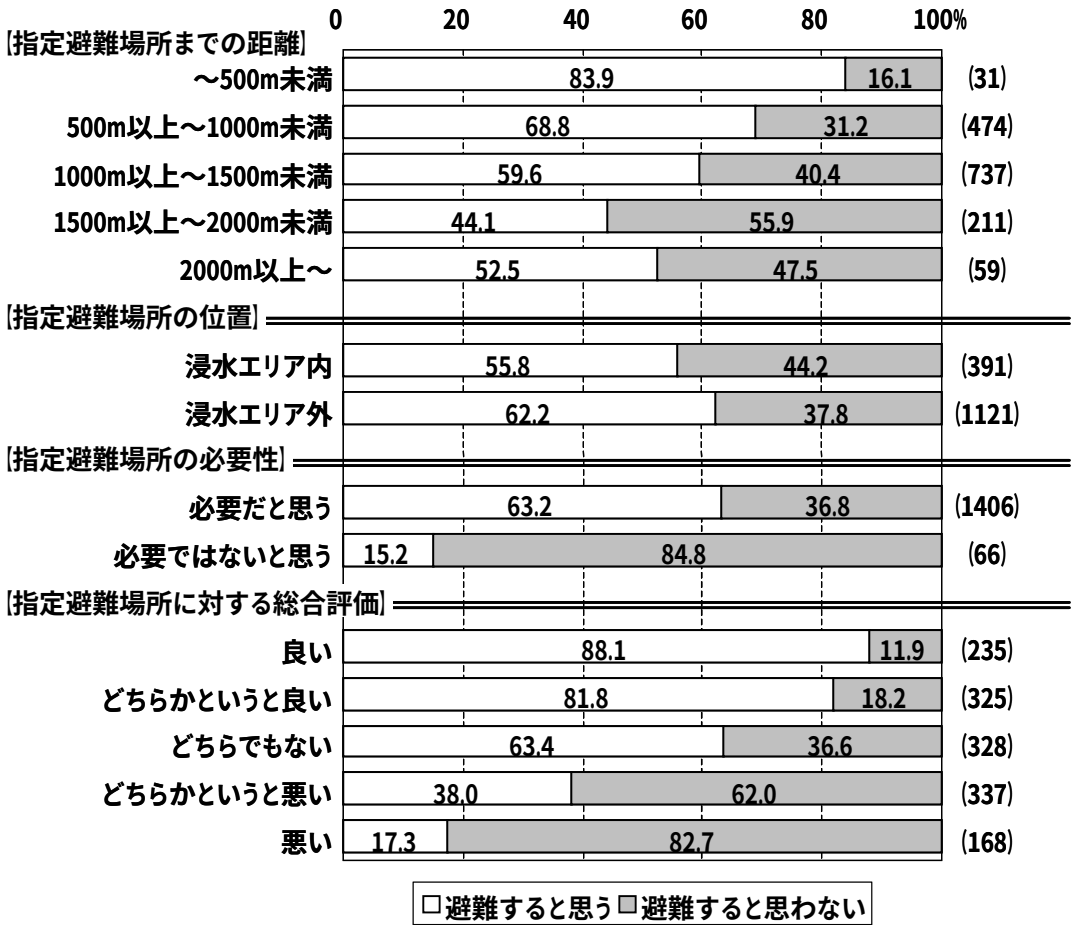


図 6-22 指定避難場所に対する避難意向と諸属性との関係

6-4 桐生市洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深に対する評価

桐生市洪水ハザードマップには、ある状況想定のもとでの氾濫解析と過去の浸水実績に基づいた地域の浸水危険度が、３段階に区分された予想浸水深（無色を含めると４段階）として地図上に示されている。このような情報を得た住民は、自宅の洪水危険度に関する認識を向上させ、平時においては被害軽減行動を、洪水時においては迅速な避難行動をとることが期待される。しかし、過去に甚大な洪水被害経験を有する住民や、近年では大きな洪水が発生していないことを踏まえ洪水とは無縁であるかのような認識を持つ住民など、住民の洪水経験属性や災害意識の状態によっては、洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深に対する評価は大きく異なることが予想される。

そこでここでは、桐生市洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深に対する住民評価の実態を、回答者の諸属性や災害意識との関係のもとで把握する。

まず、6-4-1 では、桐生市洪水ハザードマップ公表前時点での住民の主観的な自宅の浸水深予想の状況を把握する。ここで見る住民の浸水深予想は、あくまで公表前時点であるため、桐生市洪水ハザードマップに掲載されている情報は住民の予想には反映されていない。次に、6-4-2 では、桐生市洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深の読み取り状況を把握し、6-4-3 では、ここで読み取った自宅の浸水深に対する住民評価の実態を把握する。

6-4-1 洪水ハザードマップ公表前の時点での住民の浸水深予想

ここでは、桐生市洪水ハザードマップ公表前における住民の主観的な自宅の浸水深予想の実態を、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深との一致状況との関係のもとで把握する。分析対象のデータは、桐生市洪水ハザードマップ公表前に実施している第一回調査での回答である。

point

- **桐生市洪水ハザードマップの公表前時点では、洪水ハザードマップ上に示される浸水深と同様の危険度で自宅の浸水深を認識している住民は約 40%に上った。また約 30%の住民が、洪水発生時に予想される自宅の浸水深を、洪水ハザードマップ上に掲載されている浸水深よりも楽観的に認識していたといえる。**
- **このような傾向は、年配者ほど顕著であり、また、カスリン台風に関する災害教育や災害伝承を有しない住民や、豪雨の発生可能性を低く認識する住民において顕著である。**

・図 6-23 は、洪水ハザードマップ公表前における住民の自宅の浸水深予想と、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深との関係についてみたものであり、図 6-22 はその一致状況について示したものである。
・図 6-23 によると、洪水ハザードマップ上で浅い浸水深を示された地域に居住する住民ほど、ハザードマップ公表前の住民の主観的な自宅の浸水深予想とハザードマップ上の浸水深が一致する傾向にある。
・図 6-24 によると、洪水ハザードマップ上に示される浸水深と同様の危険度で自宅の浸水深を認識している住民は約 40%にのぼり、また約 30%の住民が、洪水発生時に予想される自宅の浸水深を、洪水ハザードマップ上に掲載されている浸水深よりも楽観的に認識している様子がわかる。
・洪水ハザードマップ公表前における住民の自宅の浸水深予想と、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深との一致状況が約 40%と高い確率であったことには、桐生市の洪水ハザードマップが示した予想浸水深区分が 1m毎の 4 段階であったことが大きな要因ではないかと考えられる。

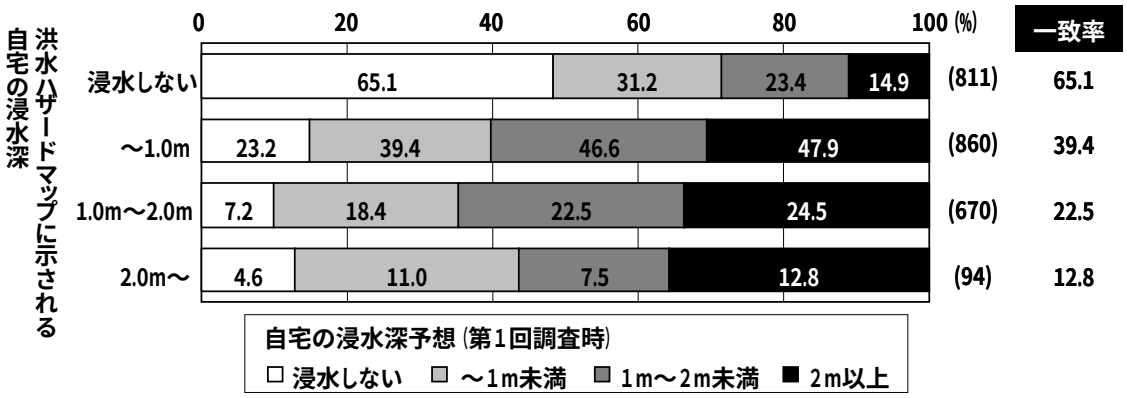


図 6-23 住民の自宅の浸水深予想と洪水ハザードマップに示される自宅の浸水深との関係

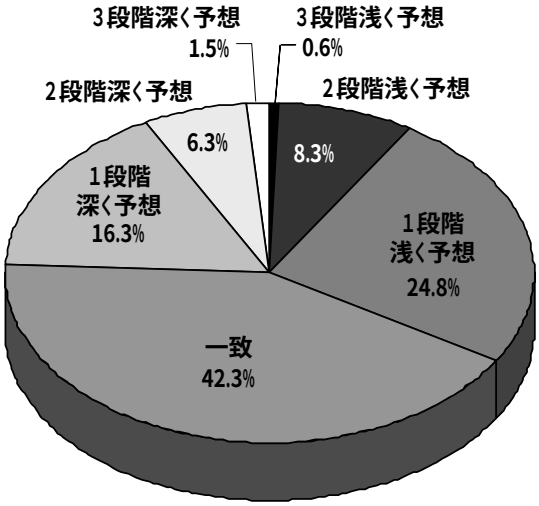


図 6-24 住民の自宅の浸水深予想と洪水ハザードマップに示される自宅の浸水深との一致状況

【住民の諸属性別にみる自宅の浸水深予想と洪水ハザードマップ上の浸水深との一致状況】

・図 6-25 は、洪水ハザードマップ公表前時点における住民の自宅の浸水深予想と、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深との一致状況を、回答者の生年別、カスリン台風による洪水経験の有無別、カスリン台風に関する災害教育・伝承の有無別、洪水に対する意識別、豪雨発生可能性認識別に、それぞれ示したものである。
・ここで傾向が現れた項目についてみると、洪水ハザードマップ公表前時点で住民が主観的に予想する自宅の浸水深と、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深とが一致する割合が高いのは、カスリン台風に関する災害教育や災害伝承を有する住民であることがわかる。
・また回答者の生年が高くなるにつれて、災害意識が低くなるにつれて楽観的傾向であった住民の割合が高くなっていることも特徴的である。

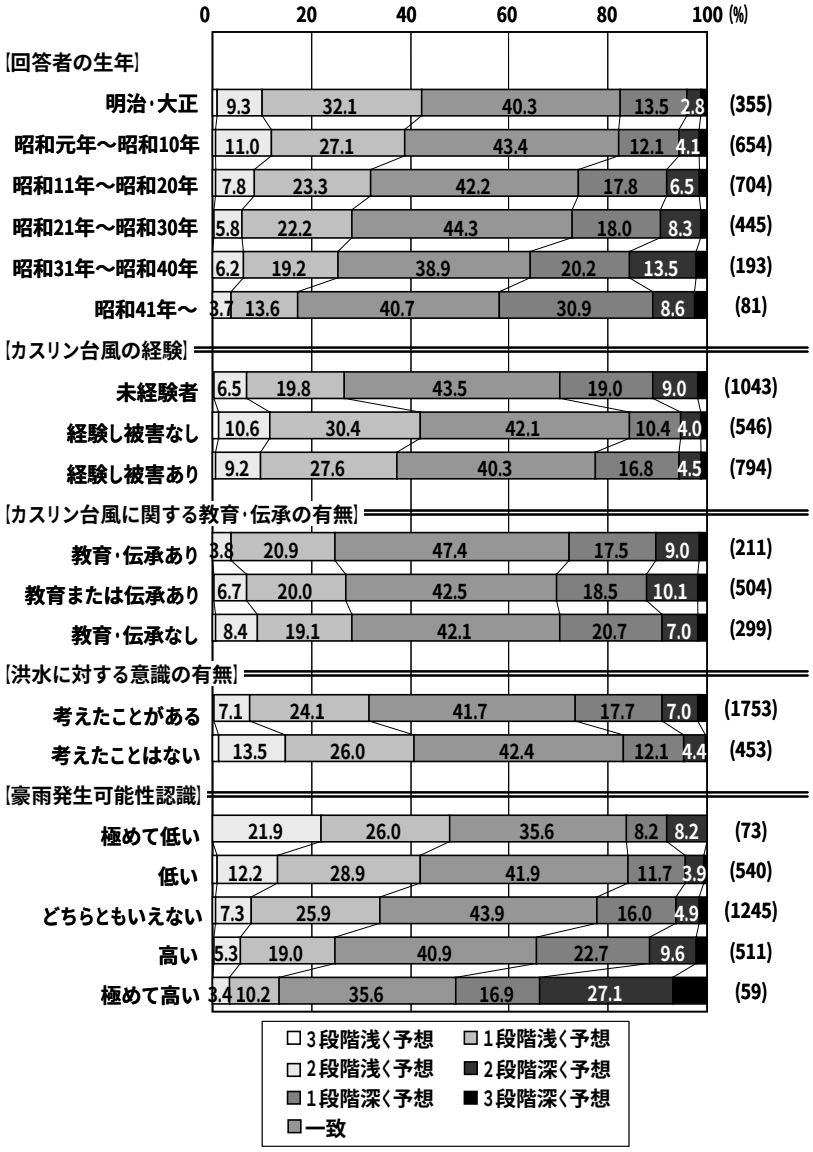


図 6-25　諸属性別に見る洪水ハザードマップ公表前時点における住民の自宅の浸水深予想と洪水ハザードマップ上の自宅の浸水深との一致状況

6-4-2 洪水ハザードマップに示される自宅の予想浸水深の読み取り状況

ここでは、桐生市洪水ハザードマップ公表後に実施している第二回調査での回答をもとに、桐生市洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深の読み取り状況を把握する。桐生市洪水ハザードマップでは、洪水発生時に予想される地域の浸水深を、「1.0m 未満(薄いピンク)」、「1.0m以上 2.0m 未満（ピンク)」、「2.0m 以上（濃いピンク)」の 3 段階（「0m（無色)」を含め 4 段階）で表示している。

point	**・約 70%の住民が、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深を正しく読み取っている。**

・図 6-26 は、住民が洪水ハザードマップから読み取った自宅の浸水深と実際に洪水ハザードマップに示されている浸水深との一致状況について示したものである。なお、ここでの「わからない」とは、回答者が桐生市洪水ハザードマップ上で自宅の浸水深を読み取ることが出来ないなどの理由により、調査票で「わからない」と回答している場合を示している。

・洪水ハザードマップに示される浸水深を正しく読み取った住民は全体の約 70%にのぼり、自宅の浸水深を正しく読み取ることが出来ていない住民は約 20%となった。

・また、「わからない」と回答する住民も約 10%ほどを占めており、洪水ハザードマップ配布後において、説明会の実施など洪水ハザードマップの理解を深める為のフォローアップが重要であると考えられる。

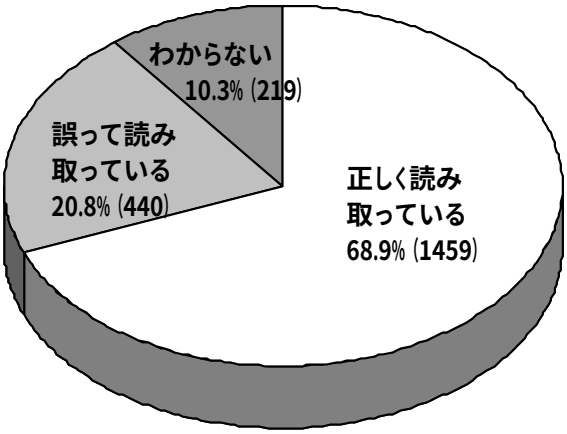


図 6-26 洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深の読み取り状況

【洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深の読み取り状況と住民の諸属性との関係】

・図 6-27 は、住民が洪水ハザードマップから読み取った自宅の浸水深と、洪水ハザードマップ上に示される回答者宅の浸水深との一致状況を洪水ハザードマップ上の予想浸水深別、回答者の生年別、カスリン台風の経験別、カスリン台風に関する災害教育・伝承の有無別、洪水に対する意識別、豪雨発生可能性認識別に、それぞれ示したものである。
・これによると、ハザードマップ上で「浸水しない」と示される区域に居住する住民は、ハザードマップから読み取った浸水深と、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深との一致率は高く、カスリン台風に関する教育・伝承共にない住民の一致率は低い。
・また、年配者ほど、誤って読み取った割合が多くなっていることがわかる。

図 6-27　洪水ハザードマップに示される自宅の予想浸水深の読み取り状況と諸属性との関係

6-4-3　洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深に対する現実性評価

ここでは、住民が読み取った桐生市洪水ハザードマップに示される自宅の浸水深に対して、その現実性をどのような認識で評価しているのかについて把握する。なお、ここでの集計は、住民が読み取った自宅の浸水深と、桐生市洪水ハザードマップ上の回答者宅の浸水深とが、一致している回答者を対象に行うものとする。

> point　**・約 70%の住民が、洪水ハザードマップ上に示される自宅の浸水深に対して現実的であると評価している。**

・図 6-28 は、洪水ハザードマップ上の自宅の予想浸水深に対する住民の現実性の評価を示し、図 6-29 は、住民を洪水ハザードマップの予想浸水深区分別に分け、住民の現実性評価について、カスリン台風の経験や教育・伝承の有無、洪水発生可能性認識別にみたものである。

・図 6-28 によると、約 70%の住民が、洪水ハザードマップに示されている自宅の浸水深に対して現実的であると評価しているものの、「現実的だとは思わない」「どちらかというと現実的だとは思わない」とする回答も約 30%を占めている。

・図 6-29 から読み取ることが出来る特徴的な傾向は、洪水ハザードマップ上で浸水しないとされる地域に居住しカスリン台風を経験したが被害がなかった住民や、深い予想浸水深を示される地域に居住しカスリン台風による被害経験を有する住民は、洪水ハザードマップ上で示される自宅の浸水深に対して現実的であると評価する傾向にある。

・また、教育・伝承がない住民ほど、現実的であるとする評価が増加する傾向にあることが特徴的といえる。

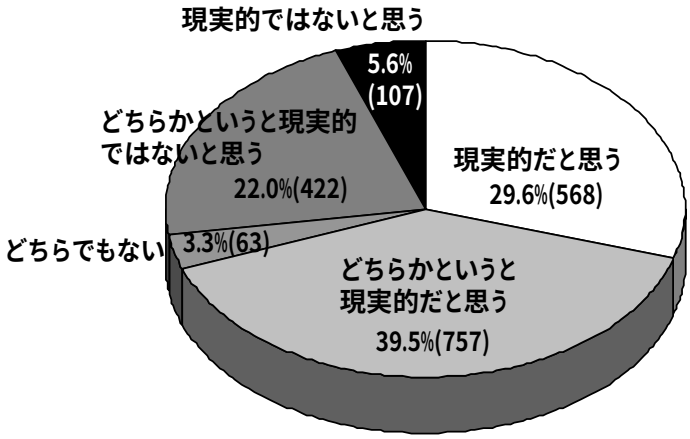


図 6-28　洪水ハザードマップに示される自宅の予想浸水深に対する住民の現実性評価

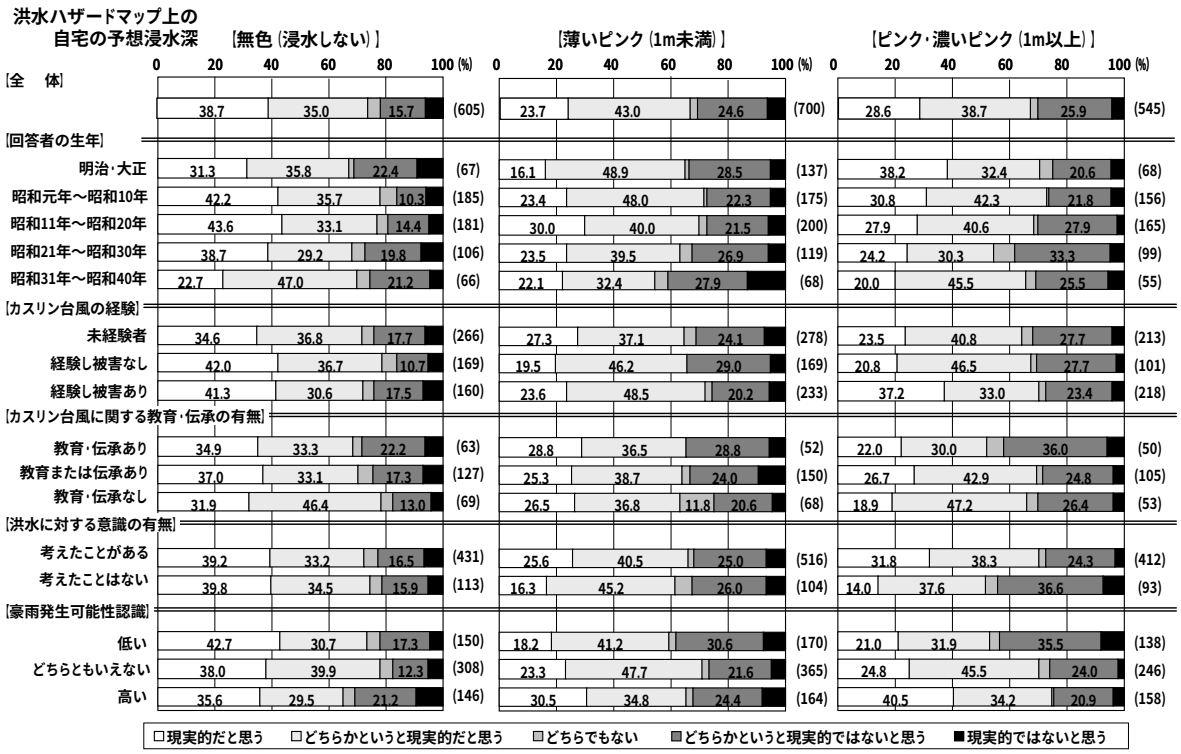


図 6-29　洪水ハザードマップの予想浸水深区分別にみる住民の現実性評価

6-5 洪水ハザードマップ閲覧後の洪水に対する住民意識

住民が洪水ハザードマップを閲覧することにより、洪水に対する適切な危機意識が醸成されることを、洪水ハザードマップは重要な目的としている。そこで、ここでは、洪水ハザードマップの評価指標の一つとして、ハザードマップを閲覧した後の住民の洪水に対する意識の把握を行う。このとき、洪水に対する住民意識の具体的な項目として、洪水の発生可能性に対する考え方と浸水被害に対する不安感について把握する。

point
- **洪水ハザードマップに示されているような洪水が実際に発生すると考えている住民は、半数に満たない。**
- **洪水ハザードマップ閲覧後に「安心感を持った」「どちらかというと安心感をもった」といった安心感を抱いた住民が半数以上を占めている。**
- **特に、洪水ハザードマップにおいて浸水しないと示されている地域に居住する住民は、安心感をもったとする住民の割合が顕著に高い。**

6-5-1 洪水ハザードマップに示されているような洪水の発生可能性に対する住民意識

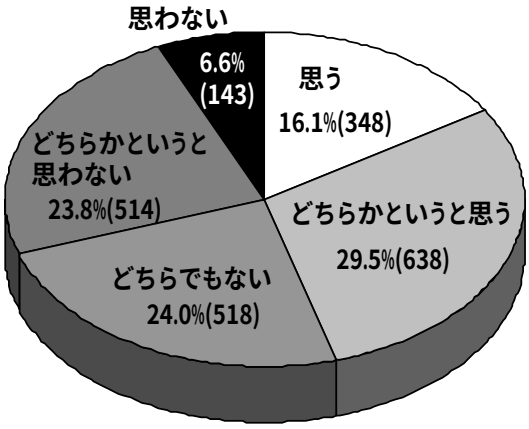
・ここでは、洪水ハザードマップ閲覧後の洪水ハザードマップに示されているような洪水の発生可能性について、住民意識の把握を行う。なお、ここでの分析対象には洪水ハザードマップにおける浸水深を正しく読み取っている住民に限定している。

・図 6-30 は、洪水ハザードマップに示されているような洪水の発生可能性についての住民意識をみたものであり、図 6-31 は、それを、回答者の生年、カスリン台風の経験、カスリン台風に関する教育・伝承の有無、洪水に対する意識の有無、豪雨の発生可能性認識について、洪水ハザードマップに示される自宅の予想浸水深別にみたものである。

・図 6-30 によると、洪水が発生する可能性があると考えている住民の方が発生しないと考えている住民より多いことがわかる。

・図 6-31 をみると、どの予想浸水深においても、回答者の生年が昭和 21 年以後よりも昭和 21 年以前の方が、洪水発生の可能性があると考えている。そして、カスリン台風による被害経験を有している住民や、教育・伝承のある住民は、それらがない住民よりも洪水の発生可能性があると考えていることがわかる。

・また、洪水について考えたことがある住民や豪雨が発生することがあると考えている住民ほど、洪水の発生可能性を肯定する傾向にある。



（質問：洪水ハザードマップに示されているような洪水が発生すると思いますか。）

図 6-30　洪水ハザードマップに示されているような洪水の発生可能性に対する住民の意識

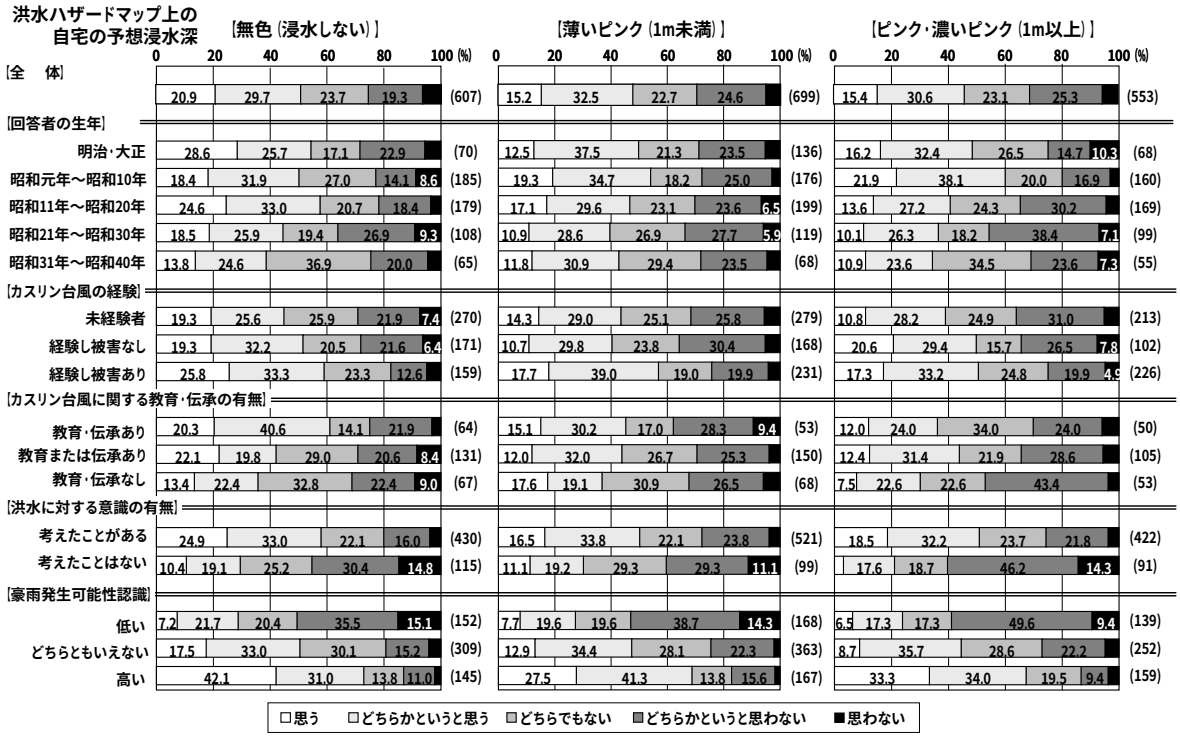


図 6-31　洪水ハザードマップに示されているような洪水の発生可能性に対する住民の意識

6-5-2　洪水ハザードマップ閲覧後の浸水被害に対する不安感

・ここでは、住民が桐生市洪水ハザードマップに示される自宅の予想浸水深の閲覧により自宅の浸水被害に対して安心感を持ったか否かについての把握を行う。なお、ここでの分析は、洪水ハザードマップに示されている自宅の予想浸水深を正しく読み取っている住民を対象としている。

・図 6-32 は、住民が洪水ハザードマップに示された自宅の予想浸水深を閲覧してからの浸水被害に対する住民意識をみたものであり、図 6-33 は、それを、回答者の生年、カスリン台風の経験、カスリン台風に関する教育・伝承の有無、洪水に対する意識の有無、豪雨の発生可能性認識について、洪水ハザードマップに示される自宅の予想浸水深別にみたものである。

・図 6-32 によると、「安心感をもった」「どちらかというと安心感をもった」といった安心感を抱いた住民が半数以上を占めていることがわかる。

・図 6-33 の洪水ハザードマップに示される浸水深別にみると、自宅の予想浸水深が浸水しないと示されている住民は、大きく安心する傾向にあるといえる。

・次に、回答者の生年別にみると、生年が高くなるにつれて安心するという傾向があり、カスリン台風の経験別にみると、未経験者に比べ経験者の方が安心する傾向にある。ハザードマップ上で浸水しないとされる地域では、特に被害の無かった住民ほど安心感をもったとの回答が多くなっている。

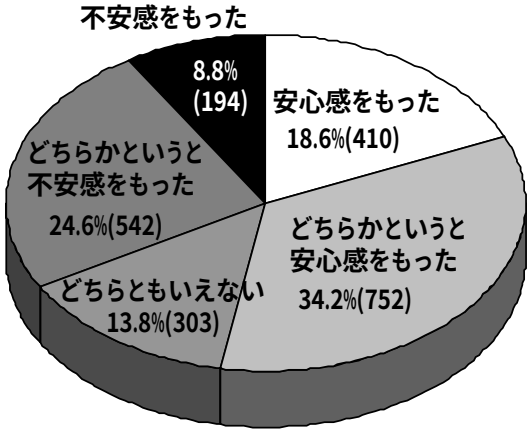


図 6-32　洪水ハザードマップ閲覧後の浸水被害に対する考え

図 6-33　洪水ハザードマップ閲覧後の浸水被害に対する考え（予想浸水深区分別）

6-6 おわりに

ここで示される傾向としては、洪水ハザードマップへの関心度・評価は高いことが認められる。記載内容項目に関しても、それらのほとんどを比較的わかりやすいとする住民が多く見られるなど、住民は、行政からの情報提供手段の一つとして、掲載される項目やそこで示されている情報の詳細等について、その必要性や有効性を高く感じていることを伺うことができる。しかし、洪水ハザードマップ上に記載されている内容項目に関する理解度や読み取り状況などは、必ずしも高いとはいえず、その原因としては住民が持つ経験・地域・教育伝承等の属性の有無やそれに基づいた災害意識の高さのバラつきを挙げる事が出来る。

洪水ハザードマップの持つ被害軽減効果を最大限に高めるには、洪水ハザードマップが地域の洪水に関する特性を十分に踏まえていること、またそうした配慮をもとに掲載されている内容が地域住民にとって必要かつ有効性の高いものであることが重要となる。
さらに、それに加えて地域住民がそれをどのように理解し、平常時の事前対応や災害時の適切な避難行動に役立てるかという点も十分に配慮しなくてはならない。

ここでは、前者に関しての地域住民の評価は比較的良好であったといえるものの、後者に関しては、閲覧後の保存方法において「見やすい所への貼付」が少なかったことにも現れているように、まだまだ自治体から働きかけなくてはならない点も多く伺う事ができた。

適切な災害意識が継続的に維持され、洪水ハザードマップを本来の目的に沿う活用をされるには、住民の洪水ハザードマップによらない災害意識の啓発をはじめとして、洪水ハザードマップの今後の活用方針の改善や記載内容の工夫、定期的な改訂などさらなる配慮が必要といえる。